

メッセージ

4 イエスの救い(3) 進歩への道「知ること」 ゴットホルド・ベック

18 もう一つの病 松田 博

7人の証し

29 主は私に永遠の命を与えられた 村上房美

37 主よ、あなたはいつさいのことをご存じです 竹田竹子

48 小さな者に目をとめてくださる主 仙石真由美

59 主は生きておられます 山科一雄

64 数えてみよ、主の恵み 山科理永子

77 一つの^{とげ}棘と忍耐 野口 隆

87 イエスさまは決してあなたを離れず
またあなたを捨てない 野口幸子

イエスの救い(3) 進歩への道「知る」と

ゴットホルド・ベック

今回は、ルカの福音書23章33節から43節、そしてローマ人への手紙6章1節から11節を学び「進歩への道、すなわち知ること」について考えてみたいと思います。

主なる神様のご目的は、私たちが主イエス様の似姿に変えられていくことです。これが私たちの内に実現する時に、私たちはパウロと同じように、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」(ガラテヤ2:20)と、言えるようになります。

ところで問題は、いかにしてそのようなことになるかということです。

これまで私たちは、どうしても知らなければならな

い基本的な二つの事柄について学んで来ました。「人間の罪と主イエス様の血潮の価値」、そして「私たちの古い人に対する主イエス様の十字架の価値」です。この事実がなければ、私たちは揺るがないしかりとした土台の上に立つことはできません。この恵みの事実こそ、私たちの信仰生活の土台なのです。

新約聖書を見ると、主イエス様の血潮と十字架の間には、明らかに違いのあることがわかります。ローマ人への手紙の1章1節から5章11節までには、「私たちがなしたことは何か」、「罪を犯した」、「罪を消すためには何があるのか」、「主イエス様の血潮がある」。そして、その結果は、赦しであるとして書き記されています。それは次の二つのみことばを見るとすぐにわかります。

罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。(ローマ 6:6)

神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもつて見のがして来られたからです。(ローマ 3:25)

ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。(ローマ 5:9)

そして、ローマ人への手紙5章12節から8章の終わりまでには、「私たちは何者か」、「罪人である」。「その解決の手段は何か」、「十字架である」。そしてその結果は、解放であるということが書かれています。ローマ人への手紙6章6節を見るとわかります。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは

イエスの救い(3) 進歩への道「知ること」

これまで見てきたように、イエス様の「血潮」と「十字架」は分けられています。主イエス様の救いの御わざはひとつでした。つまり主イエス様の救いには、この両面があるということです。そして、私たちはこの両面をそれぞれに体験して、自分のものとしなければならぬのです。

主である神様のご目的は何でしょうか。すでに何回も繰り返し述べてきたことですが、もう一度申し上げましょう。私たちが御子イエス様の似姿に変えられていくことが、神の御心であり、ご目的です。このために、主イエス様の血が流されました。私たちの赦しのために、そして赦された私たちが主の似姿に変えられていくために、主イエス様の血潮は流され、私たちと共に、主が十字架で死なれました。これは私たちが知らなければならぬ揺るがない事実です。

私たちはこれらのことを学んできましたが、実際にはどうでしょうか。私たちは現実に主イエス様の似姿に変えられて行っているでしょうか。実際に約束の勝利の生活を営んでいるでしょうか。もしそうでないとしたら、どうすれば、そのようになれるのでしょうか。

この問いに対する答えを、ローマ人への手紙6章から8章を学んでみつけましょう。その答えは次の四つの側面を持っています。

第一に知ることです。6章3節に「あなたがたは知らないのですか。」、6、9節に「私たちは知っています。」「知る」という表現が3回も出てきます。

第二に計算することです。6章11節に「思いなさい」と書かれています。(ここの「思いなさい」はギリシャ語で「計算する」という意味があります)

第三は捧げることです。6章12、13節に誰に捧げるべきかが書かれています。

第四は御霊によって歩むことです。おもに8章4節に御霊に従って歩むのは何のためか書かれています。

知ること

その1 どうしても知らなければならぬこととは

何か

その答えは、私たちが主イエス様とともに十字架につけられたのが、「歴史的な事実」であるということです。

ローマ人への手紙6章1節から11節までは、この歴史的事実をはっきりと述べています。イエス様が死なれる時、私たちもイエス様の内にあってイエス様とともに死にましたから、イエス様の死は私たちの身代わりの死となりました。この事実を心の目で見たことのない人は、霊的に進歩しません。

主イエス様が、私たちの罪を一身に背負い、罪のかたまりとなって、十字架の上で死なれたということを知らなければ、私たちは義とされることはできません。それと同じように、もし、私たちが主と共に十字架につけられて死んだことを心の目で見なければ、前進す

イエスの救い(3) 進歩への道 「知ること」

私たちは、これらの四つのことを実際に体験しなければなりません。この四つを体験しないうちは、罪を犯しては、赦していただき、また罪を犯し、また…と言うふうに、信心深い顔をして回転木馬に乗っているような状態になってしまいます。

どうすれば内面的、霊的に進歩し、前進することができるようでしょうか。また勝利の生活を送り続けることができるのでしょうか。さらに、どうしたら私たちの内に、主イエス様の似姿がかたち造られていくのでしょうか。

まず、「知ること」によつてです。ここからは「知ること」について、三つの質問に分けて考えてみましょう。一つ目は、私たちは何を知らなければならないのか。二つ目は、私たちはどのようにして知るべきか。三つ目は、私たちはなぜ知らなければならないのか、です。では、この三つの点についてご一緒に見てみたいと思います。

ることができません。罪だけでなく、私たち自身と共にイエス様は十字架におかかりになったのです。

あなたは、どのようにして罪の赦しを自分のものとしたのでしょうか。まず、主イエス様があなたの罪を一身に背負い、身代わりに十字架で死なれたことを認めました。そして、イエス様の血潮があなたの一つひとつの罪をすべて、完全に聖めることを知りました。このように主イエス様が罪の負債をすべて負い、十字架の上で死なれたことを知った時に、あなたはどのようないましたか。

その時あなたは、「どうぞ、私のところに来て下さい。私の罪のために死んでください」と、祈ったでしょうか。そうではなく「主イエス様、あなたは私のために、もうすべてを成しててください。あなたの感謝致します」と祈ったに違いありません。イエス様が、あなたのために、十字架の上ですべてのことを成就してくださったことは、もうすでに過去に行われた事実だから

です。

それでは、罪からの「解放」のためには何をしたらよいのでしょうか。罪の赦しと同様に、祈って願う必要はありません。もうすでに救いの御わざ、つまり「罪の赦しと解放の御わざ」は事実として終わっています。ですから、その事実をしつかりと知って、ただ感謝すればよいのです。

主である神は、私たちをキリストの内に置いてくださいました。ですから、イエス様が十字架で死なれた時、私たちも共に死んだのです。これが事実ですから、「イエス様、私は悪人です。私を十字架につけてください」と、今更祈る必要はありません。あなたは、すでに罪が赦されていることを知った時、「私の罪を赦すために来てください」とは祈りませんでした。それと同じように、「イエス様、私の自我を十字架につけてください」と祈る必要はありません。

罪の赦しは血潮により、自我からの解放は十字架によって、もうすでに成されています。これは過去に行

あなたのためにキリストが死んでくださった。これは揺るがすことのできない事実です。

さらに、ローマ人への手紙6章6節には「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられた。」、8節には「私たちがキリストとともに死んだ。」と書いてあります。これも動かすことのできない事実であります。なぜ私たちは、「キリストとともに十字架につけられた。」のでしょうか。また、私たちが十字架につけられた日付はいつでしょうか。昨日だったでしょうか。今日でしょうか。明日でしょうか。

神のみことばは、「私たちがキリストとともに死んだ。」と述べています。私たちが十字架につけられて死んだのは、イエス様があの二千年前に死なれたのと同じ時であり、歴史的な事実です。

あなたはイエス様が十字架で死なれたことを、なぜ、信じているのでしょうか。そのことを感じるからですか。いいえ。あなたは、今までにそれを感じたことはいないと思います。あなたが信じているのは、神のことば

イエスの救い(3) 進歩への道「知ること」

われた事実であります。あなたにできることは、主イエス様があなたのために十字架におかりになったことを、あなたを死に導いてくださったことを感謝することだけです。

愛する兄弟姉妹よ。主に感謝し、この事実の光の中を歩みましょう。そのとき、詩篇106篇12節のみことばが、私たちのものとなります。「そこで、彼らはみことばを信じ、主への賛美を歌った。」と書いてあります。

「主イエス様が、十字架の上ですでに死なれたということを信じますか」と聞かれて「もちろん、信じています」と答えます。なぜそれを信じているのでしょうか。なぜならば、神のみことばである聖書にそればかりと記されているからです。この神のみことばである聖書が、主は私たちの罪のために死なれただけではなく、私たちと共に死なれたことを告げています。

ローマ人への手紙5章8節には「キリストが私たちのために死んでくださった。」と書いてあります。私のため、

である聖書にそう書いてあるからです。

ルカの福音書23章33節から43節にあるように、主イエス様とともに並んで二人の強盗が十字架につけられました。この事実を、あなたは感じる事ができません。でも信じています。神のみことばである聖書にそう書いてあるからです。

あなたはイエス様が十字架におかかりになり、死なれたこと、またイエス様とともに二人の強盗が十字架刑で死んだことを信じています。しかし、あなたも共に十字架につけられてしまったことを、信じているのでしょうか。

二人の強盗はそれぞれ違う十字架につけられました。またイエス様と時間を異にして死にました。しかしあなたは、イエス様と同じ十字架にかかり、同じ時間に死んだのです。どうしたらこの事実を知ることができるのでしょうか。

主イエス様ご自身がそう言われたから、知ることができるのです。この知識は、私たちの感情とは何のか

かわりありません。私たちが感じようと感じまいと歴史的な事実なのです。主イエス様が十字架の上で亡くなられ、二人の強盗が十字架で死んだことも事実です。同じように私たちも、主と共に十字架の上で死んだ。これも動かすことのできない事実です。

私たちは死んだのです。運命のサイコロは、もうすでに振られたのです。そして、ローマ人への手紙6章7節には、すでに「死んでしまった者は、罪から解放されているのです。」と書いてあります。これこそが、信者にとっての福音ではありませんか。

私たちが十字架にかかるということは、私たちがどんなに意志を働かせても、もがいて努力しても自分の体験となるものではありません。これは、すでもう成された御わざを、信仰によって自分のものとする以外に方法がありません。

あなたはどのようにして救われたのでしょうか。どのようにして信者になったのでしょうか。聖書を読むことによってでしょうか。それとも祈りによって、教

会に来ることによって、または献金することによって救われたのでしょうか。決してそうではありません。あなたはある時、もうすでに主イエス様が、あなたのために成していただくった御わざを発見し、その救いの御わざを心に受け入れ感謝しました。その時、あなたの心の内に喜びと平安と望みが湧いてきたのです。

兄弟姉妹よ。次のことを覚えていただきたいのです。救いと主の聖さに至ること、つまり「赦しと解放」は、同じ土台の上にあります。あなたは、罪を赦されたのと同じように、罪から解放されることができるのです。神の用いられる解放の方法は、人間の用いるそれとはまったく異なります。

人間は、罪を自分の努力で抑えつけ、その上を乗り越えて行くことにより罪から解放されようと思いますが、神は、古い人を捨て去ってしまうという方法をとります。多くの信者は自分の弱さを悲しんでいます。もっと強ければ良いのにと考えますが、失敗します。さら

ないでしょう。

その2 どのようにして知るべきか

続いて二番目の問い、私たちはこの歴史的実事を、どのようにして知らなければならないのでしょうか。答えは、啓示によります。

キリスト者の第一歩は、啓示による知識で始まるはずのものです。この啓示による知識は、他のいろいろな真理についての教え、頭の知識とはまったく違った性質のもです。私たちの心の目が開かれて、キリストの内にあって私たちが何をいただいているのか、それがわかった時に、この啓示による知識を自分のものとしたことになります。これは御霊がなしてくださることです。

あなたは、なぜ自分の罪が赦されたことを知っているのですか。その知識はどこから来たのでしょうか。教会で誰かが教えてくれたのでしょうか。いいえ、そ

に一生懸命努力して、自分の力で解放されなければと考える結果、罪の力を深く身に覚ええます。また、罪の力に対する自分の無力さをしみじみ味わいます。その失敗の体験は、しばしば私たちを誤った方向へと向かわせます。

私たちが往々にしてその時に願う求めるのは力です。何とかして、罪に打ち勝つ力を得なければならぬと考えます。もっと強くなりさえすれば、この性格的に弱い点が強くなりさえすれば、と考えて悲しくなってしまう。しかし、そのように己おのれをあわれむのは、神のとられる解放の道ではありません。

主なる神の私たちを解放する方法は、私たちを次第に強くすることではありません。日増しに私たちを弱くすることです。主なる神は、私たちに罪の力からの解放を成し遂げてくださいます。それは、私たちの古い人を強めることによってではなく、私たちの古い人の働きを殺すことによって成し遂げてくださるのです。これを知る人は、もはや自分の力で努力することをし

うではありません。この知識は、主イエス様ご自身が啓示によって、上から与えてくださったのです。もちろん聖書の中に、罪の赦しの事柄が書かれているのを読むことはできます。しかし、読んだ人自身の知識として信仰に結びつくのは、栄光の父ご自身、主である神が、知恵と啓示との霊をその人にたまわった時です。その時はじめて、この歴史的事実があなたのものとなるのです。聖書に書かれている神のみことばは、このようにして、あなたにとって生きたことばとなる必要があります。

罪の赦しは、啓示によって自分のものとなることができました。罪の力からの解放も同じです。あなたが心の目をはっきりと開き、イエス・キリストの内に、自分がもうすでに死んでいることを発見するならば、罪の力からの驚くべき解放を体験することが可能です。

ローマ人への手紙6章6節には「私たちの古い人が

キリストとともに十字架につけられた」とあります。みことばを暗記することもできるでしょう。でも、それだけでは十分ではありません。「我、キリストとともに十字架につけられたり」のみことばの事実を、啓示によって知らなければなりません。私たちはそれを、感じることも、理解することも、すぐに悟ることもできないかもしれません。しかしそれを知っています。頭ではっきりと理解できなくても、救われたこと、主イエス様と共に十字架につけられたことは、知らず知らずのうちに自分のものとなっています。それは啓示によって知ったからです。

もしあなたが、自分は主イエス様とともに十字架につけられた、という事実を啓示によって知るならば、その知識は、何ものによっても動かされない深い知識になります。

多くの勝利の生活を送っているキリスト者がいます。が、その人々にいったいどうしたら、そうなるのかと

尋ねると、その答えはまちまちです。たいていの人は、自分の体験が正しいということだけを主張するために、自分の気に入ったみことばを言います。これは悲しむべきことと言わなければなりません。その人が通った特別な経験や、特別な教えは、そんなに大切ではありません。その人が経験によって、主イエス様を、また主イエス様がなされた御わざを心の目で見ただかどうかが大切なのです。

もしその人の体験や証しが、主イエス様から離れていて、イエス様とあまり関係がないようなら、役に立たないということです。パウロは、ローマ人への手紙6章6節でこの点を強調して、私たちは「キリストとともに十字架につけられた」と語っています。

中国で福音宣教した信仰の偉人、あのハドソン・テラーの信仰の戦いをご存知でしょうか。かつて彼は、自分の内から主イエス様の溢れるいのちが流れ出るような生活を心から求めていました。しかし、どうしたらイエス様の中に飛び込むことができるのか、その術

を知りませんでした。懸命に努力しましたが、無駄でした。

ところが突然、解放の日がやって来ました。ある時、聖霊によって彼の心の目が開かれ、自分はすでにイエス・キリストの内にあって主と共に死に、主と共に葬られ、主と共によみがえり、主と共に天に座らせていただいていて（エペソ2・6）ということを知ったのです。

主である神は、ハドソン・テラーにこれらのことを、みことばをもってお語りになられました。その結果、神が自分などの知らないすべてのことをご存知のお方であることを悟り、神のみことばによって、しっかりと自分で信仰の計算をして、踏み出そうと決めました。この時から、彼は驚くべき信仰の生活に入るこ

とができたのです。
主がぶどうの木であり、自分はその枝である。自分はぶどうの木の一部である。これは以前からそうだったのであり、今そうなのではないということ

を知ったのです。「私を、ぶどうの木の子にしてください」と願うのは愚かしいことだ、とわかったのです。

例えば部屋の中にすでにいる人が、一生懸命その部屋に入りたいと思って努力するのは馬鹿げたことで、考えられません。これと同じように、もし啓示により心の目が開かれ、私たちはもうすでに主イエス様の内にあるということを知るならば、イエス様の内に入ろうとすることがなくなるはずです。

啓示によってみことばを知れば知るほど、私たちは自分のために祈ることが少なくなり、主に感謝することが多くなるでしょう。なぜ、私たちはそんなに自分のことについて祈るのでしょうか。もうすでに主が成してくださっていることに、心の目が開かれていないからです。

次のような例もあります。ひとりの信者が、自分の霊的な状態を顧みて非常に悩んでいます。この人は、ほかの信者の勝利に満ちた立派な生活を見て、自分は

あのようではない、自分は信者じゃないのではないかとさえ考えこんでいます。そこへ、二人の信者がやってきます。その人に同情して二時間以上も、「あなたはイエス様から離れては何事もなすことができないのですよ。イエス様から離れては何も得ることができないし、何も経験することができないのですよ」と、一生懸命に話しをしますがダメでした。悩める信者は二人に言います。「私はもともとと、祈らなければならぬい」。すると二人が、「イエス様はもうすでに、あなたにすべてのものを備え与えてくださっているのですよ。今さら祈り求めることはしないのですか」と言いました。すると悩めるクリスチャンは、「イエス様は、まだ私にすべてを与えてくださってはいません。もしイエス様が私にすべてを与えてくださっているならば、こんなにすぐ怒ったり、相変わらずこんなに弱い性格のはずがありません。私は、もともとと祈らなければならぬいのです」と。二人は「それでは、あなたは祈り求めたら、祈ったことを全部もらえますか？」と聞

きました。「残念ながら、今まで何もただけませんでした」と悩める信者は告白せざるを得ませんでした。すると二人が「私たちは救われるために何も努力しませんでした。それと同じように、自分が聖さに至るためにも、努力を必要としません」と言いました。

そこへ三人目の兄弟が入って来て、そばにあった魔法瓶を悩める兄弟に見せて話しました。「君、もしこの魔法瓶が、どうか魔法瓶にしてくださいと祈ったらあなたはこう思いますか」。「それはあなた、馬鹿げていますよ。もうすでに魔法瓶なのですから」。「君、そうだろう。でもあなたも、今まで魔法瓶と同じように愚かしいことをやり続けて来たのですよ。主である神は、あなたを永遠の昔からキリストの内に置いてくださり、あなたは、キリストの内です。死に至り、キリストとともにのみがえられ、今や新しい命、勝利の命に生きているのです。ですから、『主とともに十字架につけてください、勝利の生活を送らせてください』と祈り求める必要は、もうないのです。主は、古いあなたはす

に死んでいる、あなたは永遠の命を持っている、とおっしゃっておられます。あなたがすでにいただいたものをいくら祈り求めても、その祈りは愚かな祈りです。もはや必要ありません。…もう、すでに主が成してくださるのです。ただ、この事実の心に目を留めることが必要なのです。あなたは、あなたの古い人が死ぬように、懸命に努力する必要はありません。また、死ぬまで辛抱して待つ必要はありません。あなたは、すでに死んでしまっているのですから。あなたは、ただ主の成されたことを心の目で見て、それに対して心からなる感謝の祈りを捧げさえすればよいのです。『神様、感謝いたします。あなたは私のような者を、キリストの内に置いてくださり、キリストとともにすべてのものをお与えくださいました。心から感謝致します』と言えはよいのです」。

こうして、三人目の兄弟が、勝利の生活の秘訣について話した時、主はあわれんでくださり、悩める兄弟に上からの光を与えてくださいました。そして彼は、

御心になつた生活ができるようになったということです。

その3 なぜこの事実を知らなければならないのか

最後の問いです。私たちは、なぜこの事実を啓示によつて知らなければならないのでしょうか。答えは、私たちのあらゆる問題を根本的に解決へと導いていただくためには、どうしても十字架が必要だからです。この点について少し考えてみましょう。

今、日本の政府が、酒の害は市民生活を脅かす非常にひどいものであるから、「酒を飲んではいけない」という法律を設けたとします。そして警察官が、あらゆる場所や酒場に行つて酒を没収^{はつしやう}したとします。これでも果たして飲酒が止むでしょうか。いいえ。それだけでは十分ではありません。酒を造る工場を閉鎖してしまわなければ、何の役にも立ちません。

私たちは強情です。私たちの行ないは、いわば「酒」

から解決します。最後にもう一度ローマ人への手紙6章をみましょう。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。
(ローマ 6:6)

ここに「私たちは知っています」とあります。本当に私たちは私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたことを知っているでしょうか。あなたはこのことを啓示によつて知つたでしょうか。それとも、実はまだ知っていないのでしょうか。3節にはこう書いてあります。

あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。

イエスの救い(3) 進歩への道「知ること」

という製品です。イエス様は十字架の上で血潮を流され、罪をお赦しになりました。製品の取り締まりをなさつたわけです。しかし主は、それだけでは満足なさいません。製品ばかりではなく、工場自体を無くしてしまいたいのです。罪人をどうにかしてしまわなければならないと思つておられるのです。

主イエス様の血潮は完全で十分でしたから、私たちは努力なしに罪の赦しを得ました。同じように、私たちは自分の力を用いなくても、罪の力から解放されます。主イエス様は、完全な救いを成し遂げられた時、製品つまり罪のことだけでなく、工場つまり罪人そのものについて、お考えになつておられました。

主イエス様の血潮は、^{おののおの}各々の一つ一つの罪から私たちを聖めてくださいます。それとともに、初めの人アダムから受け継いだ罪の性質をも十字架にかけて死んでくださいました。どうかこの歴史的事実を、この神の事実を、啓示によつて見るができますように。そうすれば、すべての問題が氷が溶けるように、根本

(ローマ 6:3)

私たちがキリスト・イエスにつくバプテスマを受けたのは、その死にあずかつたことを証しするものでした。主イエス様が、私たちの心の目を開いてこの事実を見させてくださいますように。

本メッセージは、ロバの子サバーの「ベック兄 暦年ファイル」に録音テープが収録されています。

次号掲載予定は、「進歩への道『計算すること』」です。

もう一つの病

松田 博

毎年四月に行なわれている大学の同窓会が、今年は、新型コロナウイルスのため中止になってしまいました。最近の同窓会では皆が後期高齢者なので、話題はほとんどそれぞれが患^{わづ}っている病気の治療についてです。

でも病気が治ったからといってその人ははたして幸せになれるのか？ 長生きすればする程、将来に対する不安も多くなってくるのではないのかな？ と私は思いました。

長血の女

マルコの福音書5章25節から34節には長い間、病で

苦しんでいた女の癒^{いやし}の話が書かれています。

ところで、十二年の間長血をわずらっている女がいた。この女は多くの医者からひどいめに会わされて、自分の持ち物をみな使い果たしてしまったが、何のかいもなく、かえって悪くなる一方であった。(マルコ 5:25-26)

彼女は病をいやすために多くの医者にかかりました。その結果はどうだったでしょうか。少しでも良くなっていればあきらめもついたでしょう。しかし、財産をすべて使ってしまったにもかかわらず、かえって悪くなり、病が癒やされる希望は完全に断たれてしまいました。彼女は絶望していました。

イエス様との出会い

ある時、絶望の中にいた彼女の近くにイエス様が来られました。彼女はうわさでイエス様がなされた素晴らしいみわざを聞いていたので、「医者には治すことの出来ない病もイエス様には治すことが出来る」と堅く信じて直ぐにそれを実行しました。

彼女は、イエスのことを耳にして、群衆の中に紛れ込み、うしろから、イエスの着物にさわった。「お着物にさわることでもできれば、きつと直る。」と考えていたからである。すると、すぐに、血の源がかれて、ひどい痛みが直ったことを、からだに感じた。(マルコ 5:27-29)

彼女がしたことは群衆の中に紛れ込み、「きつと治る」と堅く信じてイエス様の御衣に触れただけでした。しかし、彼女が御衣に触れた瞬間、この世の医者では十二年かかってでも治すことが出来なかった病が直ちに

癒やされました。さらに、「血の源がかれた」と書かれているようにイエス様のいやしは、一時的ないやしではなく、その病の源を癒す完全な治療でした。

もう一つの病

さて、マルコの福音書5章25節から34節の中では触れられていませんが、この女はもう一つの深刻な病を患っていました。その病気はどのようなものでしょうか。それは、

- ・すべての人が生まれながら持っている病です
- ・しかし、人間は誰一人として自分が持っているこの病に気付いていません

・この病は肉体の病よりもより深刻であり、その治療は肉体のいやしよりも重要です

・この病が起す諸症状は創造主なる神様を怒らせ、悲しませているものです

同じマルコの福音書の7章でイエス様は人の外側に

もう一つの病

現れるこの病の症状を挙げています。

人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。(マルコ 7:20-23)

ここに書かれているような悪い思いや行ないは誰でも思い当たるのではないでしょうか。これらの行ないは注意すれば、一時的には抑えることが出来るかもしれませんが。しかし、再び同じ悪い行ないをしてしまっている自分に気が付くのではないのでしょうか。それは絶えず私たちの心の中から湧き出て来て人を汚すのです。

当時は治療が出来なかった長血と言う病氣は、医学の進歩で今は治せるでしょう。しかし、このような悪い行ないを人間に起こさせる病は、現代医学によって

も決して治すことが出来ません。聖書ではこの病を「罪」と言っています。

罪の起源は、旧約聖書の創世記に遡ります。神様は天地宇宙を創造された時に人間も造られました。最初の人間は神様に似たものとして造られ、完全で罪もありませんでした。しかし、最初の人アダムは神様の命令に逆らい、食べてはならないと固く禁じられていた木の実を取って食べてしまった結果、罪がアダムに入りました。

それ以来、アダムの子孫であるすべての人間は、この「罪」を引き継いで生まれて来ております。ローマ人への手紙5章12節の前半にはこのことについて、次のように書かれています。「そういうわけで、ちょうどひとりの人(アダム)によって罪が世界にはいり」、罪を持った人間は神様から離され、神様に逆らって自分が良いと思うことを行なうようになりました。神様の目から見た人間の姿が、ローマ人への手紙3章に書かれています。

義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。

神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。(ローマ 3:10-12)

彼らの目の前には、神に対する恐れがない。

(ローマ 3:18)

ここで、「すべての人」と書かれているように、たとえ人の目には良い人、立派に見える人でも神様の目から見ると義人ではないと宣告されています。

罪がもたらした定め

罪は全ての人間に二つの重大な定めをもたらしました。ヘブル人への手紙9章には次のように書かれています。

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている… (ヘブル 9:27)

(1) すべての人には死ぬことが定まっています

先程お読みしたローマ人への手紙5章12節の後半には次のように書かれています。「罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。」人は生まれることも死ぬことも自分の意志で決めることは出来ません。それらは人生という学校の必修科目と言えます。死はすべての人に必ず訪れ、それを避けることは決して出来ません。詩篇には人間の寿命について次のように書かれています。

私たちの齢は七十年。健やかであつても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。

長血の女の持っていた肉体の病はイエス様によって癒されました。しかし、この女も遅かれ早かれ神様の定められた時に死を迎えなければなりません。そして、もう一つの大切なことがあります。

(2) 罪を持った人は死後にさばきを受けなければなら
ないと定められています

ヨハネの黙示録には人は死んだ時、全員神様の前に
立たされると書かれています。

また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座
の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれ
た。また、別の二つの書物も開かれたが、それは、いのちの
書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるさ
れているところに従って、自分の行ないに応じてさばか

で自分の行ないを嘆いています。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んで
いないのを知っています。私には善をしたいという願いが
いつもあるのに、それを実行することがないからです。私
は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、し
たくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくな
いことをしているのであれば、それを行なっているのは、
もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういう
わけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私
に悪が宿っているという原理を見いだすのです。

(ローマ 7・18～21)

私は、ほんとうにみじめな人間です。だががこの死の、
からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

(ローマ 7・24)

(2) イエス様の十字架による完全な救いがあります

もう一つの病

れた。

この避けることの出来ない深刻な定めを知った時、
私たちはこの恐ろしいさばきに会わないために、今の
うちに死後の備えをする必要があります。それは、神
様と人間との間の隔ての壁となっている罪の問題の解
決です！

罪の問題の解決方法

(1) それは人間の努力では不可能です

人間の中には「罪」が存在しているので、神様に喜ば
れる良い行ないをしようとしても誰一人「義人」、即ち
「罪が全くない人」となることは決して出来ないので失
望せざるを得ません。

使徒パウロは神様の定めた律法を固く守って、正し
く歩もうと努力した人でありました。しかし、努力の
結果は絶望でありました。彼はローマ人への手紙7章

絶望的な言葉を吐いていたパウロでありましたが、
次の節からは、感謝の叫びに変わっています。

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝し
ます。
(ローマ 7・25)

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪
に定められることは決してありません。なぜなら、キリス
ト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理
から、あなたを解放したからです。肉によって無力になっ
たため、律法にはできなくなっていることを、神はしてく
ださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い
肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処
罰されたのです。
(ローマ 8・1～3)

ここに、イエス様の十字架の贖いこそが人間の持つ
て生まれたどうしようもない罪の解決の道であること
が書かれています。それは人間的な努力ではなく、神

様の方から一方的に人間に差し伸べられた恵みでした。パウロはエペソ人への手紙2章でエペソの教会の信者に次のように言っています。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることもないためです。
(エペソ 2:8-9)

罪の全くないイエス様が私たちと同じ人間の姿を取ってこの世にお生まれになり、私たち全人類の罪の身代わりとして十字架にかかり血を流して死んでくださったことにより、私たちの罪は完全に赦されていきます。イエス様が十字架上で流してくださった血こそが私たちの罪を解決するための唯一の手段なのです。ヘブル人への手紙9章には次のように書かれています。

それで、律法によれば、すべてのものは血によつてきよ

められる、と言つてよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。(ヘブル 9:22)

イエス様の救いのみわざは既に二千年前に完成されており、今私たちは恵みの時代に生きているのです。救われたいと思う人は誰でも今すぐに救いをいただくことが出来ます。

(3) 必要なことは「信じ受け入れること」です

それでは救われるためには何をしたらよいのでしょうか。最初にお読みしたマルコの福音書5章の中で長血の女の病がいやされるためにしたことは何だったのでしょうか？ イエス様を信じて御衣に手を触れただけでした。お金や様々な努力は一切必要ありませんでした。そして、イエス様のいやしは完全でした。

それと同様に、私たちの罪が赦されるために必要なことは、イエス様の御前に出ることです。神様に逆ら

ネの福音書3章には次のように書かれています。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかつたので、すでにさばかれている。
(ヨハネ 3:16-18)

(2) 神様との交わりが回復し、信じられないほど素晴らしい恵みの世界に入ることが出来ます

救われた後でもこの世で生活する限り目の前にある現状は変わりません。いろいろな困難もあります。しかし、救いにあずかった人は、イエス様を通して父なる神様から助けていただくことが出来ますので、どの

い、自分勝手に生きてきた罪を悔い改め、このどうしようもない私たちの罪の身代わりとしてイエス様が十字架についてくださった、血を流し死んでくださったことにより自分の罪は赦されていることを「信じ受け入れること」です。ただこれだけで私たちは救いを受けることが出来るのです。救いをいただくことは誰にでも出来る簡単なことなのです。

救われた人のいただく特権

イエス様を信じ受け入れた人は誰でも次のような特権をいただくことが出来ます。

(1) すべての罪(過去、現在、未来の)が完全に赦され、死後のさばきからも解放され、天の御国で永遠に生きることが約束されています

従って、死に対する不安からも解放されます。ヨハ

もう一つの病

ような環境の中でも不安や恐れからも守られます。ヨハネの福音書14章でイエス様は次のようにおっしゃっています。

あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。
(ヨハネ 14:1)

ピリピ人への手紙4章のみことばは、困難の中にいる私たちに励ましを与えてくれます。

何も思い煩^{わづら}わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知^しっていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあ^あって守^{まも}ってくれます。
(ピリピ 4:6-7)

私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽^あくことにも飢^うえることに

も、富^とむことにも乏^{とほ}しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣^{ひけつ}を心得ています。私は、私を強くしてくださいる方によって、どんなことでもできるのです。

(ピリピ 4:12-13)

また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもつて、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。
(ピリピ 4:19)

イエス様は待つておられます

マルコの福音書5章の長血の女の話をもう一度思い返してください。病を治された女がそのまま立ち去ろうとした時、イエス様は「群衆の中を振り向いて、『だれがわたしの着物にさわったのですか。』と言われ」(30節)、「それをした人を知ろうとして、見回しておられた。」(32節)と書かれていました。32節では「見回しておられた」と進行形で書かれていることから、イエス様は女

が御前に出るまで待つていてくださいました。イエス様は御前に出た女をとがめることなく、優しく「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい。」(34節)とおことばをくださいました。イエス様はこの女に単なる肉体の病のいやしよりもっと素晴らしいものを与えるために、女を御前に出させようと待つていてくださったのです。

今もイエス様は、一人でも多くの方がこの素晴らしい恵みを求めて御前に来ることを待つておられます。

松田 博 (吉祥寺キリスト集会)





ご家族と房美さん(前列左)

主は私に永遠の命を与えられた

村上 房美

この度の私の病気のことなどで、友人、知人、親族等、多くの方々からメールやお手紙等の励ましを頂きました。私の家族の為にもお祈り下さっている多くの集会の皆様にも、心より感謝とともに御礼申し上げます。私は現在自宅で、主に夫の誠、また子供たちの協力の元、いつも共に居てくださる主イエス様に守られて平安のうちに過ごさせて頂いております。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

(1テサロニケ 5:16-18)

私の毎日欠かせないお薬は「恐れるな。心配するな。思い煩うな。」とのベックさんが以前に語っておられた励ましのことばです。

肺腺癌が見つかった当時(二〇一八年九月)、このよ

ノアは、主の心になつていた。

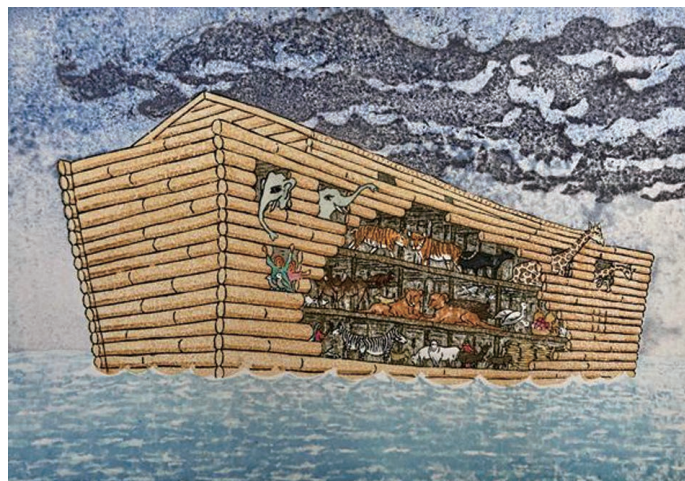
水は、百五十日間、地の上にふえ続けた。

創世記 6:8、7:24

私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。

1ヨハネ 5:20

今は恵みの時、今は救いの日です。 2コリント 6:2



うな日々を過ごすことができるようになるとは想像もできない程、私の病状は深刻なものでした。

(ヨハネ 14・3)

私のイエス様との出会い、救いについて

私は祖父母の元で育ちました。物心ついたある日のこと、「軍艦に乗っていた父は戦死したのだ」と聞かされました。

祖父母はとても愛情深く私を育ててくれました。いつしか、祖父母が死ぬかも知れないという恐怖は、日々、私を脅かす大問題となっていました。眠っている祖父母の胸元に耳をあてて、息をしているのを確認することがしばしばあった子供時代のことを、今はつきりと覚えています。

子供ながら人一倍死への恐怖心が強かった私を、イエス様はあわれんで下さいました。

わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また

来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

「神様のご用意くださる天国があるのだ。死は終わりではない」と、希望の光が私の心に差し込みました。

私は一九八四年に吉祥寺キリスト集会へ導かれました。集会に導かれた当時のこと等については、キリスト集会の証し集「光よあれ 第5集」で証しさせて頂きました。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。...

私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、も

はや私ではなくて、私のうちに住む罪です。

(ローマ 7・15、19、20)

もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(1ヨハネ 1・9)

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

(ローマ 6・23)

新たな悔い改め

二〇一八年九月、私は肺腺癌で、脊髄などの他の骨にも転移しているステージ4との診断を受けました。

脊髄に転移しているがん細胞が神経を圧迫していて、神経麻痺による歩行困難など、いつどのような事態が起きてもおかしくないとの説明を医師より受けました。

家族揃っての医師との面談の場で、病状がかなり深刻であることを告げられ、「これからの治療方法はどのようにしたいですか?」という医師の質問が終わるや否や「ホスピスに行きます!」と言いました。——イエス様に聞かないで!!

その日の夜、私が即答した直後の家族の顔が目につかび、それらが頭を離れず、病室のベッドにじっと座り込んでいました。その時、主イエス様は私に次のみことばを語られました。

あなたが繁栄していたときに、わたしはあなたに語りかけたが、あなたは『私は聞かない。』と言った。わたしの声に聞き従わないということ、これが、若いころからのあなたの生き方だった。

(エレミヤ 22・21)

私には主イエス様に相談(祈ること)なく、これまで自分で決めて勝手に行ってきたことがありました。

7人の証し

Unser Herr lebt

私は長崎県出身で被爆者手帳を持っております。被爆者に送付されてくる健康診断、定期健診の受診案内それら全てに、ある時期から一切関わらず過ごしてまいりました。

私が小学生の頃、被爆者手帳所持者は当時、定期的に血液検査や他の検査などを学校で受けるのが定例行事でした。ある日のこと、「被爆者はモルモットなのだ」という言葉を耳にしたことがあり、私は子供ながらに衝撃を受けました。

大人になってから「モルモットはいやだ！被爆者の検査、健康診断はもう受けない！」と固く決心し、七十三歳までその頑なな姿勢を続けてきてしまいました。

ですから私はこれまでに、少々具合が悪くても病院には極力行かず、薬も飲まず、かつて子供の「お母さん、病院に行ったら？」という言葉にも耳をかさずにきました。夫は「お母さんは行かないと言ったら、絶対に行

かないから…」と口癖のように言っていました。

病状の深刻さにやむなく緊急入院した日の病室で、「家族に随分と不自由な思いをさせてしまっていたんだなあ…」と改めて気が付かされました。

被爆者手帳に関することについて、主イエス様にどうするべきか今まで祈ったことはありませんでした。一度も！頑ななまでの私の、主に聞かないで自己判断、自己決定するという罪。主イエス様を知って歩む道と、自分で判断し決めて歩む道。私のうちにある闇を主がはつきりと示されました。自責の念と、取り返しのつかないこれまでの私の歩んできた歲月…どうしよう…！すると、主は答えてくださいました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたし

主よ、感謝します。

赦しと解放

差し入れて頂いたキリスト集会の証し集「主は生きておられる」13号を通して、主は私に語り、励まして下さいました。

途方に暮れてしまつて、「イエス様、助けて下さい」という悲痛なまでの私の叫びに、主は語ってくださいました。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

（イザヤ 1:18）

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

（イザヤ 43:25）

「突然行き詰り、自分が間違つた道を走つて来たと認めざるを得なくなる日が来るかもしれません。なぜそうなるのか。それは主を見上げ、主の導きを祈り、求めることを第一として生きてこなかったからなのです。私たちのすることには、何の価値もありません。主のご目的は、私の中に、また私を通して主がご栄光を受けられることです。私たちに何が起こきようと、それはどうでもよいことなのです。自分の力により頼むのではなく、主のみこころを尋ね求めるならば、主は必ず働いてくださいます。」

以上、ベック宣教師メッセージより抜粋

湧き上がる喜びと平安が私を支配しました。その時
ささげた次の祈りを忘れることが出来ません。

「これからは私自身の病気について、身体 of メン
テナンスは医師にお任せします。主よ、あなた様のこ
とだけ思っていたのです。全てお任せします。導い
て下さい。何も自分からはしません。自分で考えたり、
思ったり、計画することを放棄します。憐れんで助け
導いて下さい。」

翌日からは、肉体の痛みや苦しみもなく守られるな
かで、主イエス様が満ち満ちておられることを実感し
ました。昨晚とは打って変わった病室での日々の幕開
けでした。

毎朝目覚めと同時に、イエス様との対話で一日が始
まります。「今日この病室に訪れて下さる人々に、主
の恵みと祝福がありますように。主イエス様、どなた

が訪れて下さるかを、あなた様がお導きお決め下さい。
お任せします。この部屋をあなたの栄光で輝かせて下
さい。」

病室に溢れるばかりの人々を主は連日招いて下さい
ました。いつも病室を去られる人々のお顔は輝いてい
ました。「主よ、ここにいて下さったのですね！御名を
ほめたたえます。」

これまでのべ二百人近くの人々（集会の皆さん、友
人、知人、親戚）が病室を訪れて下さり、イエス様をお
伝えし、祈ってきました。

こうした大勢の見舞いの方々を温かく受け入れて下
さった病院のスタッフの方々にも、心から感謝するば
かりです。

入院中にはイエス様に祈りながら、集会の冊子やみ
ことばカードなどをその日に部屋を訪れてくださる医
師、看護師、理学療法士、部屋のお掃除の方々にお渡し
することも、主が導いて下さいました。

これまでに、主が私に出会わせて下さった全ての
人々の救いを、主に信頼して実を結びますように日々
お祈りしています。みことばのお約束を感謝します。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなた
の家族も救われます。
(使徒 16・31)

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響
きのうちに、ご自身天から下って来られます。それから
キリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生
き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中
に「一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このよ
うにして、私たちは、いつまでも主とともにいることにな
ります。
(1テサロニケ 4・16、17)

村上 房美（むらかみ ふさみ）

1945年生まれ

長崎県出身、町田市在住

夫 誠（まこと）

長男 元茂（もとしげ）

長男の妻 華子（はなこ）

孫 元誠（もとなり） 元悠（もとはる）

長女 真由（まゆ）



主よ、あなたはいつさいのことを
ご存じです
竹田 竹子



私は昭和二年一月、今の東京都港区で生まれました。私の戸籍簿には母の名のみが記され、父の欄は空白です。母と私との続柄の所には、私生児と書かれています。今から百年近く前の日本の社会です。さらにずばりの差別用語もあり、そう呼ばれる子どもたちは今の時代からは想像できない侮蔑おべつの目で見られ、実生活でも何かと不利益をこうむりました。

例えば入試の際、学科は合格でも家庭調査で落とされた等はよく聞く実話でした。その不運をさけるため、出生時に「うそ」の届け出をすることも行なわれていたようですが、形の上の策だけでは覆おほいきれない心の問題は、痛みを伴って長く残ってしまいます。

一度も会ったことのない私の異母妹は、「祖父母」つまり実母の両親の子として届けられ戸籍簿はととのっていたのに、大学卒業直後、自ら命を絶たったそうです。よほどの何か辛い体験つらがあったにちがいないかもしれません。私の母は、多額の金銭で父に買われた間柄だったよう

です。

「父はどこかで生活している」と気付きましたが、十歳頃までは、会ったことがありません。周囲の大人たちのひそひそ話などから、自分はふつうの家庭の子とは違う生まれ方をしたらしい、それもあまり良くない何か後ろめたい不名誉なものがひそんでいると感じるようになりました。「やはりそうだ」と思える場面も次第が増えてきました。成長するにつれ私は人と接するのが嫌いになり、閉じこもって読書にふけることが多くなりました。現実から逃げ出して幻想の世界に浸るのが常で、陰気な子でした。

一方、時代は昭和十年代に入り、第二次世界大戦の戦火が拡大した時期でした。内地の軍事色も日毎に高まり、ついに都市住民を巻き込む空襲までが始まり、危険にさらされるようになりました。一個人の身辺の悩みなどは、眼前の恐ろしい現実に呑み込まれてしま

になりました。それから十年位過ぎた頃でしょうか、ある日、買ひ物の包み紙の古新聞に父の死亡通知があるのを見ました。私は何も知らずにいました。父とはそれが終わりです。

わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。
(イザヤ 45・7)

昭和二十年十一月半ばのある午後、私は母と一緒に秋の色濃くなり始めた戸塚の里山の小道を、目的もなく歩いていました。すると、向こうから一人の男性がこちらに歩いて来ながら話しかけてきました。

「この辺で、りんどうの花をさがして、根ごと庭に植えたいのです」。そして少し言葉をかわしてから、再び歩き始める時に言われました。「この先の小屋に住んでいます。通られて喉がかわいた時は水を飲みにお寄

います。それまで時々訪れた牛込の父の屋敷へもめったに行けなくなったのは、私にとってはむしろ良いことだったと思います。折しも昭和二十年五月二十三日深夜、大空襲があり、私が住んでいた大森の家もあったという間にすっかり灰になりました。十八歳の私は煤だらけで担架をかつぎ走り回りました。自分自身は何の怪我もなく、また、数日後に自室の焼け跡を棒でつつきながら、それまでの過去が消えてしまったのを少しも惜しいとは思わず、さばさばした気持ちだったのを覚えています。

やがて、八月十五日に終戦となり、着のみ着のままでしたが、幸い当時勤めていた海軍の関係で、横浜戸塚の小さな借屋に入ることができました。母と二人だけの生活でした。

ちよつと話しがとびますが、昭和二十二年に専門学校へ進むことになり、その費用を助けてもらうため父と再びつながりが生まれました。けれども、じきに疎遠

りください」。それから何日かのち、また山道を歩いていて雑木林を抜け、一面草の生い茂る中に一軒の山小屋風の家があるのを見たのです。とたんに私は「ああ、こんな所に住みたい」と非常に強い思いにとらえられ、しばらく立ち去りがたく、夕映えの「小屋」を眺めていました。

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがついて、彼らを見捨てない。
(イザヤ 42・16)

その頃の私は、イエス様のことも十字架のみわざも何も知りませんでした。

それから何日かたった頃、偶然と呼ぶにはあまりに不思議なことが続きました。その頃勤め始めた農芸研究所で所長さんから頼まれ、サンプルを届けるために

訪れたのが、何とあの小屋だったのです。何となく予想していた通りそこに住む人が、山道で出逢った男性でした。名前も始めて知りました。

私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。…あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。

(詩篇 139・14、16)

この人、竹田清と三年後に結婚しました。主人は終戦直前、北京大学の数学の教授を辞し、長男元(はなむ)（五歳）を連れて、すでにかんりの危険コースだった日本海經由で帰国したとのことです。雨露をしのぐ小屋が無事残っていたのは本当に幸いでした。

私は前述の通り昭和二十二年研究所をやめ、戦時中

のブランクを少しでも補おうと旧制津田塾物理化学科に入学、卒業直前に入籍しました。卒業後はほとんど専業主婦として今日に至っています。ついにながら古びた「小屋」に今も住んでいます。

主人は幼い頃から肺結核を病んできました。当時はまだ特效薬もないままサナトリウムへの入所等により小康を得ていました。しかし実家の人たちとは、どうしても相容れないものがあり、大学卒業後、生家を出て完全に絶縁したそうです。その「非常な資産家」の彼の実家へは私は一度も行ったことはありません。

昭和二十五年、主人と、母親を病気で亡くした元と私と三人の新しい生活が、小屋で始まりました。その後、次男昂(あきひろ)、長女百合(ゆり)をさずかりました。主人は殆ど(ほとん)家において、数学の論文をまとめたり思索にふけつたりの日々でした。人の出入りのない静かな時間が多く、彼はよくさまざまな話題で話しをしてくれました。ある

時、人間性に絶望して自殺をはかったことがあったが、発見が早く助けられたと体験を語り、「人は死にたいからといって死ぬるものでもなく、死にたくないからといって死の時がくれば死ななければならぬ」と申しました。真理の重さが押し入ってくるようなひとときでしたが、にぶい私の心には彼の苦悩への同情があるだけで、それ以上を求めることはないままでした。

神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。(ローマ 9・18)

昭和三十年代に入って日本は復興がすすみ、人々の生活も豊かになっていきました。主人は相変わらず研究に打ち込んでいましたが、いろいろな病気で大学を休むこともよくあり、また入院も度々くり返しました。その病気は持病の肺結核によるもの、他に喘息、十二指腸潰瘍、緑内障で片眼を失明し、障害者に認定され

ました。それでいながら昭和三十九年にモスクワ大学、昭和四十五年にドイツのボン大学、ハンブルグ大学等での講演に出かけることができました。主治医の指示で私はいつも付添いました。召天後残された彼の日記には、主のお恵みに対する感謝の言葉が連ねてありました。

主人の信仰については出逢った頃から時折聞いていました。その頃教会へは行っていませんでしたが、戦時中の北京で迫害のある中、「私の宗教はプロテスタント」と明らかにしていたとのことでした。私の方はそんな対話のときも、眼前の話題をただ聞き流すだけで救い主には少しも心が向きませんでした。

ただ一つ忘れられないことがありました。昭和二十三年五月、イスラエル建国のニュースを聞いた主人が(その頃、私たちは先生と生徒の間柄でした)「ではまもなく再臨のキリストに、生きていて出会えるか

もしれない。すばらしい時に生まれ合わせたもので
す」と言ったのです。歳月が過ぎ他のことは忘れたの
に、この一言だけは覚えています。「先生は、何で遠い
国のことでこんなに感動しているのかしら？」とひそ
かに思ったものです。

昭和五十年頃、主人の既刊の数学の本で上・中巻に
続く下巻の原稿が出来上がった時、出版社から「内容
がむずかしすぎて売れる見込みがない」と断られてし
まりました。どこの社からもことわられ、主人は「もう
いいよ。原稿だけは完成したのだから」と静かに言い、
分厚いその束を片付けようとなりました。でも私は「彼
の個性の表現のような数学」を長年かかってまとめた
のを見ていて、気の毒でならず、前後のことも考えな
いまま、大学の共済の年金積立金を借りて自費出版す
る方法を提案しました。気乗りしない様子の主人でし
たが、計画はすすみ、程なく下巻千冊は仕上がって全

薬され、一時は好転しましたが、結局薬の副作用が強
くて、自己判断ですべて薬は止めてしまいました。今、
病歴四十数年、何も服薬はなく、時々関節に強い痛み
がくる日もあります。それに対応する方法が身につ
いたことを本当に感謝しています。

昭和五十七年、特に病気にいかってはいなかった主
人が私に突然言いました。「(自分は)そんなに長くは生
きられないと思っている。その日のために確かな信仰
をもちなさい。良い指導者に会えたら洗礼も受けな
さい」。それまで私はどんな内容のことでも彼が「しな
さい」と言うことには(反撥や不満のある時でも)その通
り行なってきましたが、この時は、何も逆らう気持ち
がないばかりか、嬉しくてホッとする思いに満たされ
うなずきました。

その頃主人は自宅で数学を教えていたのですが、勉
強に来ていた大出尚郎さんを通して、お母様の潤子姉

部家に運び込まれました。二階へ運びましたが、やは
り少ししか売れなかったもので、今もそのまま積んであ
ります。結局、彼は年金をもらう資格を失いました。

昭和五十一年頃、子供たちは成人してそれぞれの生
活に入り、主人と二人で相変わらずの静かな日々をす
ごしていました。少し過労だったのか私は急に高熱を
出し、急性肝炎と診断され三箇月入院しました。面会
謝絶の個室で何も喉を通らず、少し朦朧としながら私
はただ祈るばかりでした。それも絶対的な真理がある
ことは信じていましたが、誰にどのように祈ればよい
かもわからない私でした。ととのった祈りの言葉も
わきまえず、ただひたすら助けを求めていました。
弱り切った体でできることはゼロ、たったひとつ残さ
れたのが祈りでした。手厚い治療を受け、ゆつくりと
病は回復に向かい始めましたが、両脚の関節に強い痛
みが出て、関節リウマチと診断されました。ステロイ
ド剤による治療が始まり退院後さらに免疫抑制剤も投

妹からドイツ人宣教師ベックさんを紹介していただき
ました。昭和五十八年七月二十九日、初めて私は吉祥
寺集会にベックさんを訪ね、二階のお部屋でお会いし
ました。主人も同行し、ベックさんは私たち二人のた
めに長時間を費やしてくださいました。対話はほとん
どドイツ語でした。ベックさんが(私にはもちろん日
本語で)聖書を開いてお話しくださっている間中、私
はなぜか自分でもわからない涙があふれて止まりませ
んでした。そして、九月十八日洗礼のお恵みにあずか
りました。

それから一年と少し後、昭和六十年六月十二日に主
人は天に召されました。ベックさんがこれらのこと
を「光よあれ8号」に書いてくださいましたので、ここ
では省きたいと思います。

神は傷つけるが、それを包み、打ち砕くが、その手で
やしてくださるからだ。
(ヨブ 5・18)

吉祥寺キリスト集会旧会堂での葬儀も兄弟姉妹たちのお祈りの中で、一度もここで礼拝に出たことのない主人でしたのに、心からの感謝をこめてとり行なってくださいました。やもめとなった私に、主の憐れみのみわざはすでに備えられていました。主人在世の頃から生活のため、戸塚区平戸の小さな学習塾で私は働いていたのですが、町内で家庭集会が開かれていたので参加したり、また、のちには祈り会も始まって、形は変わっても今までずっと交流が続いてきたのです。時には夜九時からの兄弟姉妹合同の祈り会もあり、ちゅうど塾の終了と時刻が合うので山田健、絹子ご夫妻が往復車を出してください、車中で交わしたお話がどんなに私のあやうげな信仰を支えてくださったことか。時々兄姉たちの語られる言葉がとても立派で、自分ばかりじめな落ちこぼれだと沈みこむこともよくありましたが、「安心して行きなさい。」(ルカ7:50)と、イエス様は励ましてくださいました。

ほむべきかな。」(ヨブ1:21)と声には出さず唇を動かしていました。

純一郎が友達にさそわれ教会へ行ったのは聞いていましたが、突然のことに「イエス様、なぜですか」と聞いていつつ涙にくれていたある時、何の前ぶれもなく眼の前に、荒れ果てた、汚れ切った地上の映像がありありと浮かんだのです。そして純一郎の姿はそのどこにもないのです。その瞬間、イエス様がきよい永遠の世界へと純一郎をお導きくださり、今もともにいてくださり、私も必ず再会できるのだと、嬉しくて有難くて「イエス様有難うございます」と叫んでいました。涙はピタリと止まり、以後一滴も出ていません。あの瞬間の、まるで深い谷底から一挙に高い頂まで引き上げられたような喜びの大きさは筆舌に尽くせません。

今年九十三歳になりました。主イエス様は、この老いの身に何が必要なのかをよくご存じで、見えるもの

幼い日からの「心の傷痕」が残る私は「家族」という一語が成人してからもどうにも苦手で、無関心でいうと長い間心を閉ざしてきましたが、今は「神の家族」がイエス様からの大切な贈りものとなっています。そのおひとり、おひとり、この世の交わりからは得られない一致を持つことができますからです。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

(ヨハネ 14:27)

平成元年十二月、突然、孫の純一郎(晶の長男)が「交通事故致死」と急報が入りました。私はショックでその場にくずおれ倒れてしまいました。頭の中は空っぽ、葬儀の間ずっと「主は与え、主は取られる。主の御名は

も見えないものも豊かにくださっています。ある時はハッとしました。それまで父のことは主への不従順の「いいわけ」の道具として利用し続けてきたのだと示されたのです。何と卑怯な私、どうしたらいいのか――、何十年も前に父との関わりは終わり、自分でもこれでいいのだとスイッチを切ったような気持ちになりました。重苦しい何日が続いた後、みことばを頂きました。

わたしの名によって求めることは何でも、それをしましう。

(ヨハネ 14:13)

地上のいのちが終った時、ひとかけらも暗い部分がない中に置かれ、喜びに満ちてイエス様のお近くへ導かれますように、これが切なる願いとなり、祈りとなりました。

わたしの愛の中にとどまりなさい。(ヨハネ 15・9)

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。：
ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそ
れをことごとく知っておられます。(詩篇 139・1、4)

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてく
ださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての
咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのち
を穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶら
せ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さ
は、わしのように、新しくなる。(詩篇 103・2、5)

貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の
食物で私を養ってください。(箴言 30・8)

竹田 竹子(たけた たけこ)

一九二七年 東京港区生まれ、都立駒場高校卒、津田
熟専門学校(旧制)(現津田塾大学) 物理化学科卒

長男 元(はじめ)

次男 晶(あきら)

長女 百合(ゆり)



小さな者に目をとめてくださる主

仙石 真由美



ご家族と、真由美さん(一番左)、隣りは生前の智治さん

私は、一九六一年十二月に愛媛県の離島で生まれました。家は蜜柑農家みかんでした。私は未熟児で父が言うには手のひらにのるくらい小さかったそうです。十二月の寒い日で、助からないと思って心配していたと何度も聞かされました。主は小さい私を生かされました。

私は高校まで島で暮らし、短大進学と同時に大阪に出ました。

そのまま大阪で就職して印刷会社に入り、そこで今も仲の良い友達ができ、その友人の中に元バックパッカー(大型リュックを背負って世界を旅する人)だった主人もいて、私は一九九四年に主人と結婚しました。翌一九九五年に長男を、一九九七年には長女も授かりました。今振り返ると、この二人の子供たちは、私たち夫婦にとってイエス様と出会うための主からの贈りものだったと思います。

二〇〇〇年、この子供たちが五歳と三歳になった頃、二人には広汎性発達障害こうはんせいという障害があることがわか

りました。この障害は言葉をしゃべらない、落ち着きがない、こだわりやパニックを起こすといった症状、さらに哀しいのは、親がそばにいないのを不安に思わないということでした。心の交流が無く、母親なのに求められていない気がしました。

でも目に見える二人はほんとうに可愛くて誰の目にも病気には見えません。私は誰にもわかってもらえない悩みと心配に押しつぶされていました。私の子育てははじめなものでした。私のその頃の日課は、近所の人の誰もいない遠くの公園まで二人をママチャリに乗せて走り、時間をつぶして、暗くなるのを待ちます。そして、夕方になって背中であんな眠ってしまった娘と、手を離すと行方不明になる息子の手を握り、空いた手にスーパで買った物あいつを袋を下げて自宅まで戻り、笑顔でご近所に挨拶しながら玄関に入り、ドアを閉めて、スーパの袋を投げ出して座り込んで泣き出す、というものでした。何という愚かな人間と思われるでしょう

うが、私は世界中の人から「親のしつけが悪いんじゃないの?」「愛情が足りないんじゃないの?」と言われている気がしていました。近所の人が集まって談笑しているだけで、自分のことを言われている気がして、青ざめて身がすくみました。

主人は当時仕事が忙しく、居ないのも同然でした。また、たとえ居たとしても私にとっては言葉の通じない異星人のような人で、正直、居ない方が手のかかる人が一人減って助かると思っていました。そんなですから当時の我家はすきみきつていて、私は夕方からキッチンでビールを飲み、換気扇の前にはタバコの吸い殻が山積みでした。

その日も主人が帰って来て私に何か言いましたが、腹を立てる気力も、泣く気力もなくぼーとした感じで「いつそ死んだら楽かしら?」という思いになっていました。同時に「誰でもいい。もし神様がいたら助

けて」と思いました。そして、「あそこへ行ったらどうだろう?」とふと思ひ浮かんだのが、生駒に住んでおられた主人の友人のクリスチャン、広田さんのお宅でした。

訪ねたのは遅い時間でしたが、ご夫妻はいやな顔をせずにお宅に迎えてくださり、私は奥様に自分の状況を話したのでした。すると突然「祈りましょうか?」と言われました。「祈る…?」私はそれが何かわかりませんでした。広田さんは誰かに向かつて「天のお父様、御子イエス様、この仙石真由美さんが、あなた様からお預かりした英治君と莉彩ちゃんのことです。苦しんでおられます」と言われました。

そしてそれだけで全てが解決しました。なぜかはわかりません。聖書のみことば一つ出てこないじゃないと思われるかもしれませんが、解決したのです。

主は、いと高き所から御手を伸べて私を捕え、私を大

水から引き上げられた。

(詩篇 18・16)

暗室のカーテンが開いたようでした。子供たちは依然として病気で、私などいてもいなくてもいいようです。主人とは冷えきったままです。現実は何ひとつ変わっていませんでしたが、確かに私は解決したのを感じました。

私はこの日からみるみる元気になりました。いただいた聖書や集会のカセットテープが私をどんどん嬉しくしてくれました。祈りとともにお酒とタバコも必要でなくなりました。

二〇〇四年に、私は「大阪神戸喜びの集い」でバプテスマを受けました。この時、一度はOKしたはずの主人が、会場だったバーサイドホテルの玄関で怒り出し、対応してくださった集会の皆さんに大変ご迷惑をおかけしました。しかし、その彼も二〇一〇年に、同じ

「喜びの集い」で同じバーサイドホテルでバプテスマを受けました。ある時は広田家の地下室の住人だったり、よつちゃん(高橋義夫さん)の子供集会で一緒にお昼寝担当だったりしていた「あの仙ちゃん(主人の愛称)がバプテスマ?」というので、みんなでビックリしたり喜んだりしてくださいました。全てイエスさまの憐れみと皆様のお祈りのおかげだったと思います。

この二〇一〇年は嬉しいことと辛いことのセットの年で、子供たちは学校でひどいイジメを受けていました。特に長男がひどくて、教室から締め出される、トイレに閉じ込められて上からバケツの水をかけられるなど、イジメのオンパレードでした。

一番ショックだったのは学校側がよかれと思って設定してくださった、イジメた側の子供たちの親御さんとの話し合いの席での出来事でした。ほぼクラス全員の親御さんたちに囲まれるのが嫌でたまらないのを祈って出かけた席で、「気持ち悪いんだから仕方ない」

と言われたのです。障害についての説明など聞いてもくれません。耳を疑い怒りがこみあげて、頭が真っ白になりましたが、なぜか言葉が出てきませんでした。悔しくて何か一言報いてやりたいと、言葉を探しましたが出てきません。横に居た主人がその時静かに「それでも、どんな理由があろうとイジメは良くないことでしょう」と言ってくれました。結婚してから初めて、主人と心が通った気がして主に感謝しました。でもうなじのこわい私にとって、このことは長い間トラウマのように私を重苦しい気持ちにしました。回復には時間が必要でした。しかし今ではこのことも最善だったのだと思えます。

しかし、神である主は、私を助ける。それゆえ、私は侮辱されなかった。それゆえ、私は顔を火打石のようにし、恥を見てはならないと知った。私を義とする方が近くにおられる。だれが私と争うのか。さあ、さばきの座に

共に立つ。どんな者が、私を訴えるのか。私のところに出て来い。見よ。神である主が、私を助ける。だが私が罪に定めるのか。見よ。彼らはみな、衣のように古び、しみが彼らを食い尽くす。

（イザヤ 50:7-9）

この頃は、主人自身も取引先から精神的なパワハラにあっていました。いつも一言余計なことを言う人でしたが、この時は私が理由を聞いてもただ「自分が悪かったんだ」と言っていました。ほんとうに辛^{つら}そうであまりに酷^{ひど}いと思って「そこまで言われるなら仕事やめてもいいよ！」と見かねて言いましたが、「この仕事が無くなると困るから」と、頑張っていました。

どんな鬱^{うつ}症状が酷くなり、とうとう仕事を失い、自宅に引き込むことが多くなりました。持病のC型肝炎は集会の方の助言で完治しましたが、今度は腎臓に腫瘍が出来て、八割を切除しました。不眠症と睡眠時無呼吸症候群もかかえていて、毎日朝昼晩と、手の

ひらっぱいのお薬を飲んでいました。主人は集会に集い始めて喜んでいたのに、家族での聖書輪読や夜のお祈りも、いつの間になくなっていました。

一方の私はというと、一人元気でした。当時は特別養護老人ホームでヘルパーとして働いており、仕事に一生懸命でした。主人は辛そうだったのに、私には何の思いやりもありませんでした。家でゴロゴロしている主人は、ただの怠け者にしか見えなかったのです。私は「今こそ主人はイエス様に頼るべきだ」と思っていました。一見正しい考えで、私は、自分は正しく主人はまちがっていると思っていました。

いつの間にかイエス様はそっちのけで、自分が働いて家族を養っていると思いあがっていたのだと思います。けれども、どんな仕事を増やして夜勤まで始めてしまった結果、私は腰を痛めて、痛み止めを飲んでも立っていられなくなっていました。私はそうであってもまだ痛み止めの量を増やしたり、湿布^{しつぷ}を貼り

まくって頑張っていました。ただの自己満足と、主人へのあてつけだったのではないかと思います。

というのも、恐ろしいことに私は自分の罪の自覚にフタをすることが出来るらしいのです。意識して無自覚になれるとは、ほんとうにおそろしい者です。しかも毎日イエス様にお祈りしていたのですから。ママチャリで暗闇^{くらやみ}を走っていた頃よりも悪いと思います。

主人は二〇一六年頃には、髪を緑に染めたりピンクに染めたりしているかと思うと、突然、東南アジアに旅行に出かけて二箇月くらい帰ってこなくなりました。

もともとバックパッカーで旅慣れていましたので、それほど心配はしていませんでした。最初は一週間前に予告、次には前日に予告、次には当日、最後の方は携帯電話の位置情報を検索したらタイにいるようなこともありました。主人は、冷たくさばく妻から逃げ出していたのかもしれませんが。

私は、口では「イエス様、イエス様」と言いながら少

しもイエス様に頼っていない者でした。主人に寄り添ってあげるべきでしたのに、私は不服で嫌でした。

そして二〇一七年十月一日の朝が来ました。私は午前五時の目覚まし時計で起き上がると、半分冷たくなりかけた主人を自宅の居間で発見しました。長男の英治と私は一九番の交換手の指示で救急車が来るまで、心臓マッサージを行ないました。「イエス様、今日なんですか?」「まさか今なんですか?」「私は心の中で叫んでいました。

主人の父は、この日ちょうど自身の人工胆管の交換手術のために主人が搬送された同じ病院に入院していました。しかも、その前日に義父を車で病院に送ったのはあの本人、主人だったのです。義父は、私の連絡を受けて半信半疑で上の階の病室から降りて来て主人を見ると、「これ、ほんとうに死んだるんか? まだ温かいけど」と言ったきり、着ていた術着を脱いで自分で退

院の手続きをしました。

義父は未信者で、常日頃から自分は仙石家の六代目の長男だから仏壇のお守りの責任があると言っていたのに「智治ともしの葬儀は真由美ちゃんのやりたいようにしてくれていい」と言われました。頼んだのも主人と取り決めがあったわけでもありません。まるで奇跡のようでした。まるで何かの力におおわれていたようだったと後になって思いました。

全ての段取りが終わり明日が前夜式という夜、一度自宅に帰った私は真つ暗な部屋の窓を見ながらお祈りしました。私は主を恐れました。私はもう主人に「ごめんなさい」と言うチャンスがありません。和解することもやり直すことも出来ません。取り返しがつきません。主人はどうなったのでしょうか。最後は集会にも礼拝にも出なくなり、全くイエス様から離れてしまっているように私には見えました。それなのにあの義父が長男の集会での葬儀を許してくれています。

な私もやっと安心して涙がこぼれました。前夜式も召天式も集会の皆さんの祈りと賛美を聞いているうちに、主人が本当に天に引き上げられたんだと思えてきて、主の憐れみとご愛を改めて覚えました。主のご愛は私などの理解をはるかに越えているのだと感謝しました。

しかし二〇一七年はこれで終わりではありませんでした。主人の天国を信じて喜んだのもつかの間、今度はお金の問題が起こされました。借金の額は私に返済出来る額を超えていました。困り果てて市の相談窓口で無料の弁護士さんを教えていただき、恥をしのんで相続放棄の手続きを取ることにしましたが、そうすると収入は全て主人の口座に入っていたので、一円もそれが使えない、主人の口座からおろしたものも使えないことがわかりました。たいした額ではなくても全財産なので途方にくれました。また借りたお金を踏み倒すと思うと良心がとがめました。たった数日前にあん

「天のお父さん、智治さんはお父さんの所へ行きましたか？ イエス様に会えたですか？ 教えてください。私にわからせてください。」「私はとても赦されたいと思います。でもそれでも不信仰な私を、どうか赦してください。私は天のお父さんに赦してもらえなかったら、イエス様の十字架がなかったら、何の希望もないのです。」「そして「明日の前夜式、イエス様だけが中心となってください」とお祈りしました。

そして葬儀の日、義父は、司会者の方から頼まれた挨拶の中で、本人も知らず知らずにイエス様のすばらしさを証しされました。この前夜式と召天式は、私に再会の喜びだけを残して思いわずらいを消し去ってくれました。

地球の裏側までさまよって行っていたとしても、礼拝に来ていなくても、イエス様は主人を愛してくださっていた、決してその手を離したりされなかったのだと、そう思えました。私はそれを信じました。不信仰

なに喜んでいたのに、私はあつと言う間にまた真つ暗闇に落ち込みました。怖くて怖くて仕方ありませんでした。インターネットも電話も郵便物も通信手段全てが怖くて、パソコンの電源も落としました。インターネットでの集会のメッセージも聞けません。聞けるのは集会の古いCD一枚だけでした。ベック兄の『問題からの逃れ道』というメッセージでした。何度も何度も聞きました。「問題を見ないでイエス様だけを見なさい」とおっしゃっていました。

でもどうして問題を見ないでいられるでしょう。自分が何もせず、対策を考えたり動いたりしなかったら。祈りやみことばは今まで私を明るくしたり前向きにしたりしてくれました。でも、現実問題は解決しないと私は思っていました。ましてや自分たちの作った借金のことを神様に頼るなんてとんでもないと、心のどこかで思っていました。でも怖くて仕方ないのです。借金の督促状とくそくじょうの文面はだんだん怖くなり、脅されてい

るようです。ひょっとして住所をたどって家まで来たりしないでしょうか。電話が鳴ってもチャイムが鳴っても怖いのです。私が慌^{あわ}てて愚かなことをしでかすと弁護士さんと司法書士さんと両方から「お母さんは何もしないで。今あなたは普通の状態ではないんですから」と言われました。私はもう仕方ないから、ためしに何もしないでいようと思いました。

そのかわり聖書のみことばを読んで祈ることにしました。見つけたみことばは、「この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかりと立つて動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。」(2歴代20・17)でした。「私たちのわがままのために出来たお金の問題を、聖なる主の前に持って出ていいのかわかりません。でも助けて欲しいのです。助けてイエス様！ 私が動かないように、そして怖くないように、足りない信頼を増し加えてください」と祈りました。そして私は祈っているうちに、ほんとうに静かな気持ちになりました。イ

エス様は私が信頼を願った時に、また静かな平安をくださったのです。イザヤ書30章15節のみことば通りでした。

神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」

(イザヤ 30・15)

目に見えない恐怖は消えました。私は動きまわるのを止めてほんとうにじっとしていました。主人の名で来る督促状は全部、開封しないで破って捨てるか弁護士さんにまとめて送りました。親族全員が協力してくれました。手続きは全て無事終わりました。怖い人は来ませんでした。それどころか主人名義のマンションはスムーズに明け渡しが終わわり、新しく住む府営住宅の抽選にも当たりました。引越しの費用は、一年ほ

ど前にダメもとで申請してすっかり忘れていた所から、一年分まとめて払うという通知が来て、祈ってくださっていた集会の姉妹は「イエス様ありがとう！ イエス様すごい」と喜びをわかち合ってくださいました。

イエス様は現実問題も、どのような問題か関係なく解決して見せてくださいました。天国の主人の口ぐせは「お腹が空^すかないといいのに」で、好きなみことばは、「…かめの粉は尽きず…」(1列王17・14)でした。最後にけんか別れしたきりですが、天国で会ったら「あのみことばほんとうだったよー」と言いたいと思います。

「生きることは戦いだよー」とベックさんがおっしゃっていた通り、小さい私は何も出来ないのに、まだまだ生きていないといけないみたいです。でもある日突然その日はやって来ます。その日まで私は決して悟らず理解することもなく役立たずだと思います。

も気落ちしても思い出すことが出来ます。なんでも出来るすごいお方は、小さなだめな私のことを愛しておられ、決して私を見捨てず、私の永遠の味方なのです。

たとい主があなたがたに、乏しいパンとわずかな水とを賜わっても、あなたの教師はもう隠れることなく、あなたの目はあなたの教師を見続けよう。あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。

(イザヤ 30・20・21)

小さくなって悔い改め、いつも天のお父様と御子イエス様を呼び求めて祈る者でいられますように。イエス様をご存知ないお一人お一人にすごいイエス様のことを証し出来ますように。そしてイエス様が早くむかえに来てくださいますように。感謝しつつ。

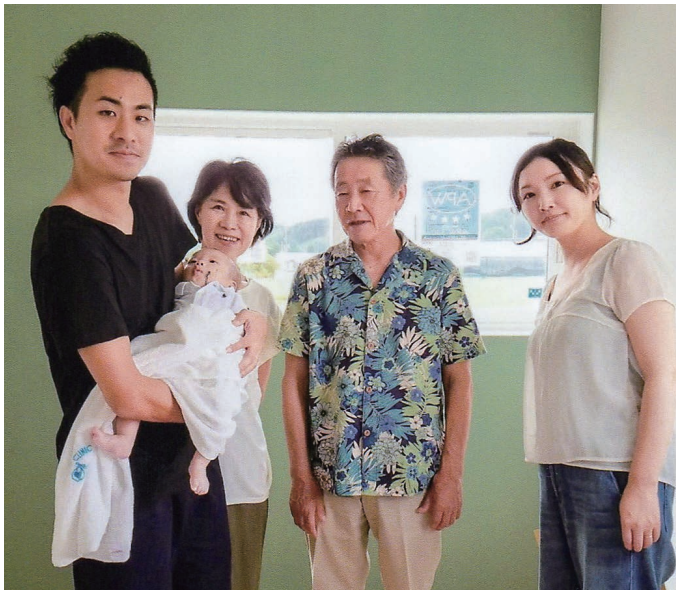
仙石 真由美（せんごくまゆみ）
浪速短期大学卒業、共栄広告株式会社を経てみどりへ
ルバーステーション勤務

天国在住の夫 智治（ともじ）
長男 英治（えいじ）
長女 莉彩（りさ）



主は生きておられます

山科 一雄



ご家族と、一雄さん(中央)

たいした努力をしたこともなく、特別な能力もなく、何かを深く考えてもおらず、人生いかに生きるべきかなんて考えることもなかったように思います。思春期のなかったような者が、この年になっても将来に希望を持つことが出来るのは大きな喜びと驚きです。

私の生家は小さな商いあきなをしていまして、裕福ではありませんでしたが、何かに不自由した覚えはありません。その店がつぶれてからはそうではなくなりましたが、大学生になっていましたので、夜のアルバイトでまあまあの小遣いを得て、享樂的に毎日過ごしておりました。そのことで悩んだこともないように思います。勉強についてもやかましく言われることもなく、躰しっけなどもうるさくなく、勝手気ままに生きていたように思います。父親は毎夜遅くまで飲み歩いていて、家族で団らんといった覚えがありませんが、そのことで辛い、父が嫌いだと思ったこともなく、そういうものだと思っていました。ですから、結婚してから遊び歩く

私に向かつて、夫婦の間を大切にしたいと家内が訴えても、何を怒っているのかわかりませんでした。

結婚しても長く子供が与えられませんでしたので、夫婦で仲良く遊んでいけばいいじゃないかと、スキー、ダイビング、ジープと二人で一緒に行き、こんなに楽しいから妻も楽しいはず、喜んでいるはずと、どんどんやっていました。後に家内の証しを聞いて自分の的外れさを知ります。家内は「仲よくいつも一緒に遊んでいたけど、そういうものを求めていなかった。もつと心のつながりを求めていた」ということでした。自分が楽しいから妻も楽しいはずと、自分本位そのものでした。

そういう者が父親の病氣、看病をめぐって考えるようになりました。母を早く亡くし（高校生の時）、兄がいたのですが実兄ではなかったので、「父が死んだらこの世の中で一人ぼっちやなあ、嫁さん言うても元は

他人やし」。そんな頃に英会話を習いに行っていたアメリカ人の宣教師さんが「イエス様を受け入れることとは神様の家族になることですよ」と言われた言葉に、そういうものが欲しいと思いました。それがイエス様を信じる一つの動機でした。

また、聖書の中の預言には、この世の終わりがあり、その時に起る様々なことが書かれています。過去のことが当たっているなら先のことも当たるはずと、ちよつと恐くなり、そのことから自分が助かるためにはどうしたらよいか考えたのです。

自分の罪がわかって悔い改めるというものではなかったのです。ですから多くの人の証しを聞いて、自分は本当に救われているのか、大丈夫なのかと心配でした。聖書は読んでいても、物語のようにも思っていましたし、にわかには信じがたい記述も、まあ昔の人たちのことだからと思っていました。

けれども、ある時急に一つ一つが全部神様から私に

宛てられたメッセージだと感じられたのです。このことは、私自身から出た確信ではないと思います。それからは聖書を読むのが楽しみとなったことを覚えていきます。目に見える悪い行いだけでなく、神様を認めず自分勝手に生きていることが罪の根本であることを示され、日々の生活の中で、自分のいやな所を見せられるようになりました。

肉の行ないは明白であつて、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興……

（ガラテヤ 5:19-21）

これら全てが自分の中にあると認めざるをえません。もともと罪の意識の薄い者です（若い時には冗談半分で警察ざたになるようなことを平気でやっていました）。そのような者でもイエス様に受け入れられてい

る安心感は何とも言えません。

そのような者が「主は生きておられる」と言えるようになったのは、子供が与えられたことが大きいように思います。結婚して七年間子供がなく、与えられるようにと祈り始めると、あるとき家内が「みことばが与えられた」と言い出しました。「わたしは来年の今ごろ：」（創世記17・21）。私はそんなことは初めてでしたので信じられず、「人には言うな」と言いきかせていました。その後、養子縁組の話が持ち上がり、まだ幼い信仰でしたので、自分の考えの中で心が揺れ動いていました。そんな中で、恵みにより、男の子が与えられたのです。

このことを通して神様は、人間一人一人を造られるお方であることを教えられ、そのご真実に触れる体験となりました。子供が与えられたから嬉しいというよりも、イエス様のすばらしさを教えられたことの方が嬉しかったのを覚えています。

また、仕事を通して教えていただきました。私は農機具を作る会社に勤めています。私が担当していた機械が多く売れたときのことです。御利益宗教じゃないと言われますが、それはそれとして主の恵みとして喜んでいました。ところがその機械を使う時期までに生産が間に合わず、納められないことがあった時には慌てました。どう考えても不可能です。焦りましたがどうしようありません。家内に電話で愚痴を言いましたら「この前、キリスト集会のメッセージで、どんな時でも上は開いてると言っていたよ」と。私は「上ねえ」。そう言われても主に頼ることのない者です。こんな信仰的でない者にはダメだろうと、なかばあきらめていました。

実は、納品が遅れそうなその地方では、春先に一度大雪が降り農作業が遅れることがあると聞いていました。すると、その雪が降ったんです。けれども一週間程度遅れるだけではまだまだ間に合いません。農家のお

客様も「これが最後の雪だ、助かったな」と冷やかします。「ああ、もうダメや」と思ったら一週間後にまた雪が降りました。「また少し助かったけど今度こそ最後や」と言われます。この後、「最後の雪」が四度も降りました。結局農作業が一箇月近く遅れ、機械は全て納品できました。まさに主は助けてくださいました。

このような成功話をする御利益じゃないかと思われるのですが、それよりも主は私の小さな私生活の中にも働いてくださり、全能者だと知ることになったことが私にとっては大きな喜びとなりました。

そのことをある集会に集う方に話したら「あなたは困難な時にはまた祈ればいいですね、主は生きておられますから」と言ってくださいました。それから「主は生きておられる」という言葉は、私にとって確かな喜びとなりました。

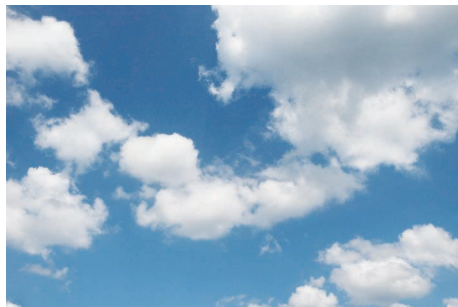
このような人生を真面目に考えることもなく、楽しいことばかりを求めて生きてきた者にも主は御自身を

現わしてくださり、頼るようにしてくださったことを心から感謝しています。

山科 一雄（やましなかずお）

一九五一年七月大阪生れ、現在 奈良県生駒市在住

妻 理永子（りえこ）



数えてみよ、主の恵み

山科理永子



椅子に座っている左の方が理永子さん

私の生家は、夫を若くして亡くした祖母が一切を取り仕切り、息子達（私の父が長男で、次男、三男、一番下に長女）は祖母の我がままにふりまわされているような家でした。

小学校の頃、学校から帰ると家がぐちゃぐちゃになっていて、それは祖母が暴れた後でした。家の者全員が祖母の機嫌をそこねないように生活していました。そんな理由もあって、次男も三男も大学やら仕事やらで関東の方に出て行きました。私の父も私が小二ぐらいの時に仕事で関東の方に単身赴任しました。父は月に一度は必ず帰って来ていましたが、私と妹は父が出かける時いつも泣いていました。それから祖母は寂しさもあってますます大変になり、母はよく一晩中、祖母の枕元に座らされて、小言を言われており、私と妹は階段をそーっと途中までおりて様子をうかがったりしていました。おばあちゃんなんか早く死ねばいいと思っていました。

私は二十四歳の時、五年くらいおつき合いをしていた主人と結婚し、実家を離れましたが、母を早くそんな所から解放してやりたいと思っていました。実家がそういう所だったので、結婚は私にとって、とても自由でのびのびしたものに感じました。仕事もしていましたが、三十歳くらいになっても子供ができず、そのうち仕事もしんどくなってきました。学校では男女平等だと言われて育ったけれど、社会に出ると決してそうではなく、男性の倍、頑張らなければ女性は認められませんでした。

どうして世の中には男と女しかないのだろう、どうして人間と動物は違うのだろうと、様々な疑問や悩みが湧いてきて、主人にこれらのことを話してもワケがわからないらしく、子供ができないこともあわせて、悩んでいる時、友達がいい所があるよと教えてくれました。占いだと思っていたのが実は〇〇教という所でした。その友達と仕事帰りにそこに行き、巫女さんの

ような人の前に手を合わせて座ると、その人が歌うようにして私の過去や、今のことなどいろいろ言うのです。何々が見えますが、それはこうしたらいいとか、いろいろ。そして人は木の股から生まれたのではなく、人から生まれたのだから、あなたの先祖を大事にして祀りなさいと。それで私と友人はウソかホントかわからないけれど、やってみようと思い、家に仏壇はないけれど、ろうそくを灯し線香を立て、実家の仏壇から過去帳なるものを書き写し、先祖の名前を連呼し、般若心経も覚え、朝晩拝みました。そして月に一度くらいその〇〇教へも行っていました。

私の祖父、主人の祖父母、その親の親、いったいどこまで名前をあげ供養すればいいのか、そして子供がでないということは、自分が死んだ後も祀ってもらえないわけで、それはそんなに不幸なことなのか、私は自分の人生に霊の「さわり」などあってはならないと、結構一生懸命やっていました。そのうち人は死んだら

どうなるのかと思いはじめ、その〇〇教や仏教に関する本を読み、この世は修行の場で、死んだら元いた霊の集まり？に帰り、それもいろいろ階級があつて、修行の結果、良しと認められたら上のクラスに、良くなければ下は動物や昆虫などに。でも虫になつても、かつての自分が人間であつたと覚えてなければ苦しくもなんともないじゃないかと、いろいろ疑問だらけでした。その巫女さんに石の上にも三年と言われていたので、ともかく三年はやつてみようと思つていました。

ある時とても苦しくなつて「神様、ほんとうに神様と呼ばれている方はおられるのですか？それは大きなエネルギーのようなものですか？おられるなら教えてください」と、祈りとも叫びともつかないことを心の中で言つていました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開か

れます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。(マタイ 7:7-8)

そのしばらく後、主人と英会話を習おうかと言つて、ある時、駅で外国人がビラを配つていたのでらうと、教会での英会話教室でした。授業料は安いし、日曜の夜なので二人で行けるし、参加しました。

英会話教室の後バイリンガルで聖書のお話もあり、残つて聞いたら勉強になるよと言われ、素直な？私はそれにも参加しました。そこで、「わたしは主である。：わたしのほかに神はいない。」(イザヤ45:5)というのを聞いて最初のうちは、キリスト教はうまいことを言つて他の宗教を排斥するなあと思つていました。が、そのうち「あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。」(詩篇55:22)というみことばや、主が男を造り、そのあばら骨から女を造られたこと、動物と人間は初めから全然ちがうものとして造ら

れたことなどを聖書を読んで知り、このイエス様という方にかけてみようと思ひました。女を男のふさわしい助け手として造られた。だから私はしんどかったのかと思ひました。男と肩を並べて一生、仕事をしていきたいと思つていたので。

イエス様を信じていきたいと牧師に言つて洗礼を受けることになり、主人に話すと「僕も受ける」と言うのです。「え？何で？」と思ひましたが、主人も神様の家族になりたいと思つたらしいのです。二人一緒に受洗しました。でもまだその頃は、夜寝る前に私がいろいろ祈ると、主人は「それは昼間祈つて。疲れているので早く眠りたいから、夜のお祈りは短くしてくれ」と言つていました。

その年の夏、徳之島へダイビングに行く予定でしたが、夜はお酒を飲んでツアーの人達と遊興酩酊の宴会になるだろーし、台風も来ていたので私はもう行きたくなくなつていました。「やめよう」と、主人に言いま

したが、遊ぶことにかけてはガンと言ふことをきかない人で、すでにツアーには申し込んでいたこともあり、空港へ向かうバスの中でも私は祈り続けました。「主人があきらめられるように、ハッキリとあきらめられますように」。するとあるうことか、空港についたとたん、主人が「やめとくわ」と言つたのです。他の人達は皆出発しました。後で聞くと、出発した人達は、九州まで飛んで乗り継ぎで徳之島へ行くはずだったので、その乗り継ぎ便が飛ばなくて皆帰つてきたといふのです。飛ばなかった便はその便だけで、前後の便はみな飛んだそうです。ほんとうに主はハッキリあきらめさせてくださいました。

そんなことがあつてもまた、年末にフィリピンへ行くダイビングツアーがあり、主人が行きたいと言つて申し込みました。私は前回止められたからやめた方が：と思ひましたが、主人の思ひは強く、私は「行くのがみこころでなければ止めてください。出発の朝にでも

頭が痛くなるとか…」と祈っていましたが、主人は「頭痛くらいなら行く!」と思っただけです。

出発一週間前に(主人は農業機械の仕事をしているのですが)左手人差し指の先をスプロケット(チェーンと連動して回転する歯車)にまきこんでカットしてしまいました。私はびっくりして、これは主からの答えだ、でもちょっとひどいんじゃないかな、イエス様、と思いました。後でこれは必要最小限の主のあわれみだとわかりました。

けがをしても主人はダイビングに行くというのです。一緒に行くツアーの中に外科医がいて、「処置する道具をみんな持って行ったから行く」と言われて。

主人が消毒のため、病院に行き、先生にそれを言う、「行っていいえ、もっと短くなってもいいんやたら」と言われてやと断念しました。それから主人の祈りが変わりました。

供がほしいなら簡単です。名古屋にいる女性の宣教師さんが望まれないで生まれた赤ちゃんをクリスチャンホームに合法的に養子縁組しているから、電話しましょう」と言っただけ電話をくれました。電話口に出た私にその方は「女の子がいいか、男の子がいいか」と聞かれ、私は何も考えていなかったけれど、さきに「女の子」と言いました。その頃になると、私にはもうあのみことばがほんとうに与えられたものかどうかわからなくなっていました。

そんな時、主人が出張で山形に行くことになり、スキーもできるので一緒について行くことにしました。出発前に教会の祈り会に出てから行くとうと主人が言うので、私は早く出発したかったのですが祈り会に出ることになりました。宇都宮から宣教師さんが来られていて、その方は祈りの課題で「今三箇月の赤ちゃんを預かっていて、その子は韓国人と日本人のハーフで、アメリカで養子先が決まっているが国籍の問題で今裁

そのことと前後して、私達は子供が与えられるよう祈っていました。結婚して六年くらいが過ぎていました。当時通っていた教会の方々も祈ってくださっていました。ある時聖書を読んでいて、不妊の女サラが子供を与えられるところで思わず「私にはいつですか? イエス様」とたずねた時、次のみことばが目にとびこりました。

しかしわたしは、来年の今ごろサラがあなたに産むイサクと、わたしの契約を立てる。(創世記 17:21)

そして私はほんとうに主に感謝し、礼拝しました。でもしばらく主人にはそのことは伏せていました。来年の今頃ならもうすぐ妊娠するはずだから、と仕事をやめて待ちました。でもなかなか妊娠しませんでした。そうこうしているうち、私の住んでいる町にクリスチャンでアメリカ人の大工さんがいて、その方が「子

判中。アメリカに行けないかもしれない。その時は日本でも親が必要ですよ」と言われると、皆が私達の顔を見るのです。牧師さんは、宇都宮は山形へ行く途中だから、寄って赤ちゃんに会ってきたらいいと言われまして。せっかくなのでバカンスが、「どうしよう。えらいことになった」という思いでいっぱいになり、赤ちゃんを見てもどうしたらいいのかわかりませんでした。「もし、あの子がアメリカに行けなければ、主が私達にと言われていることとして受け入れます」と祈っていました。

何箇月かしてその子は結局アメリカに行けなくなり、私はビルの屋上から飛びおろす思いで「受け入れます」と、返事をしました。私にはえらいことになったという気持ちと不安しかありませんでした。そんな私を見て、牧師が「ちょっと待ちなさい。導きだしたら喜びも平安もあるはずですよ」と言われ、宇都宮の宣教師さんと話をされたところ、宇都宮の宣教師さんがその子を六箇月世話をしていたら、もう手放せなくなつて

しまったということがわかり、一件落着きました。

そうこうしているうちに、またあのアメリカ人の大工さんが、名古屋の宣教師さんからの連絡が遅いから電話してみましようと言われ、連絡をとられました。するとその宣教師さんはアメリカに一時帰国しておられ、代理の人が私の名前が見つからないから書類を送るので記入して送り返してくださいと言われました。書類がきて、ハテどうしようと思い悩んでいる時、ハタと気づいて産婦人科に行くことと妊娠していることがわかりました。クリスマスの日でした。それはみことばをいただいたからちょうど一年たったときでした。

出産するまで男か女かわからなかったもので、男なら名前は「イサク」しかないねと言っていました。主はほんとにご真実で約束を守ってくださいさるお方であり、私達の幼い信仰を見て、イシユマエルを得ようとしたことも止めてくださいました。とてもとてもうれしい出来事でした。

されていた笹川郁夫さんの証しがあった時で、私達はわけがわからない状態でしたが、帰りの車の中でとても満たされている自分を感じていました。

奈良に戻ると、主人はそうでもなかったのですが、私はもう前の教会に行く気はなくなっていました。主人は牧師さんに呼び出され、数人でちがう所のキャンプに行ったことを注意されました。主人も牧師さんとの様々な話の中で疑問を感じ、二人ともその教会に行く気がなくなり、イエス様と離れる気はなかったもので、「どうする?」と言ったまま、結論を出せないでいました。そんな時、吉祥寺キリスト集會に集っていた方が神戸に帰ってきて、集會がもたれていると聞き、神戸は遠いなあとはいつつ、一度きりになるかもしれないけれど行ってみようと思いました。それからずーっと神戸キリスト集會(震災後は芦屋キリスト集會)に集っています。

集會に集いだして証しの本などを友人、親族に送り、

私達の息子イサクが生まれてしばらくした頃、妹の子供が二歳で脳腫瘍しゅようとわかり、私達家族にとっては晴天の霹靂へきれきでした。イサクが生まれるまでは私はとてもその姪を可愛がっていて、姪もよくなついていたので、とりました。手術もしましたが、脳幹にできていたので、とり切ることは無理でした。彼女の耳元でイエス様の話をし、イエス様にもうすぐ会えることを伝えました。三歳で彼女は天に召されました。そのことで私は通っていた教会で飢え渴きを覚え、どうしてこんな苦しいことが妹の上におきるのか、答えは教会では得られませんでした。様々な教会の講演会にも行きましたが、渴いたままでした。

そんな時、吉祥寺キリスト集會の軽井沢キャンプに誘われ、軽井沢なんて関西からはあまり行かない所だし、遊び気分で教会の若い人達七、八人で、当時旧軽井沢で行われていたキャンプに参加しました。軽井沢に来るのは最初で最後と思っていました。末期がんが冒

父のすぐ下の第一家が五人全員救われました(「光よあれ」第五集に載っています)。その何年か後、おじの長男(私のいとこ)が、盛岡の大学から御代田のキャンプに集う時、いとこの乗る自転車が早朝スピードを出していて、トラックと激突し、突然天に召されました。召される少し前に神戸キリスト集會に来たことがあって司會に指名され、前後の脈絡みづらは忘れましたが、「自分の国籍は天にある」と確信をもって話していたのを覚えています。とても悲しい出来事ではありましたが、おじ一家の心が不思議と守られていたことを思います。その後、私が早く死んでほしいと思っていたあの祖母が肝臓がんだとわかりました。私は救われてから、この祖母こそ救われてほしいと願ひ祈っていました。

祈りつつ、まだ少し祖母のことを恐れつつ入院先に行き、イエス様のことを伝えました。「イエス様がおばあちゃんのことを愛してくださっているよ」と言う「何でわかるねん」と言ったので、イザヤ書四十三章四

節の「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」というみことばを伝え、イエス様がおばあちゃんの罪のために死んでくださったことを話すと笑顔になって喜んでいました。また行こうと思いつきながら帰ってきた時、父から電話があり、祖母がすぐ喜んでいて、あんなうれしそうな顔は見たことがない、また、行つてやつてくれと言われ、行こうと思つた矢先、祖母は召されました。

亡くなる前に祖母が母に、「迷惑かけたな、悪かった。ありがとう」と言つたことを、同席していた叔母から後で聞きました。私の母はそれを聞いてすべてを赦せたらしいのです。生きている時はひどいことをされていて、祖母の悪口やら、愚痴やらをいっぱい言つていた母でしたが、亡くなつてからは一言も祖母のことは口にしませんでした。母なら当然言いそうなのに。それは母がすばらしい人なのではなく、そこに赦しの神がご臨在してくださつていたことを思います。

もしませんが、天に召されていきました。彼女は小さい時、麻疹がもとで耳が聞こえなくなり、専門の学校に通っていたそうです。その学校の近くに教会があり、そこに通っていたらしく、イエス様のことはすでに知っていて素直にみことばを聞き聖歌を喜んでいました。そして召されていきました。

ほどなく私の父の一番下の弟が、五十代でがんになり、病院への車の送り迎えを私が買って出て、車の中で聖書メッセージのカセットテープをかけたり、いろいろ試みましたが、叔父は神様がいるとは思うけど、それがイエス様かどうかかわらないと言っていました。もうすぐ亡くなるという時、病院へ行つてお祈りしようと思いましたが、私の母が付き添つていて、祖母の時もそうでしたが私がイエス様の話をしようとする袖を引っぱたり、いらぬ話をして邪魔をするので、行く道中「母を打ってください。母を打ってください」と、祈っていました。病室につくとなんだかだだっ

次に主人の父の後妻さんの連れ子であった、主人と同じ名前のカズオさんのことをお話ししたいと思います。彼は夫婦間の問題から自殺を図つて、発見され命はとりとめましたが、手足は麻痺し動かず、ほとんど何の意思表示もできずベットに横たわつたままになりました。主人と私は時々病院へ行き、どうしたらいいのかわからないので、聖歌のカセットテープをかけイヤホンを耳に入れて帰つて来ていました。少し良くなり退院して主人の実家に帰っている彼を見舞いに行き、ヨハネの福音書の一章を主人が読むと、椅子にもちゃんと座れず、何もわからないだろうと思つていた彼が、みことばの一つ一つに涙を流しながら「あい。あい。」（はい）のことと答えたのです。もう彼はこれで救われたと思いました。そしてほどなく召されていきました。

それからかなりたつて主人の父の後妻さんがなくなり、救われて、というより前から救われていたのか

ろい部屋で、母が私の手をひいて、叔父の前につれて行くのです。何か話すことがあるでしょうと言わんばかりに。もう目も見えなくて、あと数時間かなという感じでしたが、意識ははっきりしていたので叔父にお祈りしていいかを聞いて祈りました。「叔父の罪のために死んでくださったありがとうございます」と。祈り終わると、叔父は「もう何も心配することないやん」と言つてほんとうに安らかになっていました。様々な心の葛藤、苦しみ、後に残す家族のこと、自分の行き先、いろんな思いがあつたでしょうが、すべてイエス様に重荷を預けることができ、平安のうちに召されていきました。

話は前後しますが、主人の父もがんになり、二、三年間闘病生活を送っていました。元気な時は、「ワシが死んだら祀つてくれへんのんか」とか言っていました。ベックさんのお話も聞かせていただき、イエス様を受け入れ、安らかに召されていきました。

そしてある時、私の父が単身赴任している群馬県の病院から母に電話がありました。「ご主人が危篤^{きどく}なので病院に来てください。二度目の肺気胸で穴があいて、肺気腫もあって今は手術もできない状態で、クシャミでもしたらもう亡くなるかもしれない」ということでした。父は四十年くらい単身赴任をしていて、月に一度帰ってきていました。私が三十代後半の頃、父には群馬に家庭があると叔母から知らされました。母に伝えたのですが、信じたくない母は、その話を受け入れませんでした。母の救いのためにも真実が明らかになりますようにと、十年以上祈っていた結果でした。ちょうど、私達家族が御代田キャンプに行っていて、帰り支度をしている時、母から電話があり、急きょ群馬に行きました。父はほんとうに苦しそうで、その時死の覚悟をしていたようです。今は手のほどこしうがないということでした。年配の女性が病室にいて、主人がその人といろいろ話をしてくれました。私は母

と会わせようと思い、母が大阪から駆けつけた時に会わせましたが、別に何事もなく終わりました。その後、担当医の先生が、（私が事情をすべてお話したので）、容態も少し落ちつき、なんとか大阪へ帰れるようにしますと言ってくださり、私はそんなことは何も頼んでいなかったのですが、不思議に先生は、帰れるようにと手術をしてくださいました。手術前に父はベックさんとも一緒にイエス様にお祈りすることができ、手術中、危険な状態にもなったようですが、イエス様のおかげで命びろいしたと喜んでいました。そして二、三箇月後、大阪へ帰ってきました。父は四十年の荒野を旅して帰ってきました。七年くらい寝たり起きたりの生活で最後は介護を要しましたが、妹は父と介護を通してふれあえたことを喜んでいました。私が枕元でみことばを読んでいる最中に召されていきました。

そして、一昨年母が九十三歳で召されました。彼女の生涯は忍耐の一生でした。認知症と歩行困難がありつぐこともなく、天の御使いたちのようです。

（マルコ 12:24-25）

私が救われてから実家を、母を、悪の呪縛^{呪ばく}から解放してくださいと祈ってきましたが、主がほんとうにそのことを成し遂げてくださいました。最後に自戒をこめて、

ヨシユアは年を重ねて老人になった。主は彼に仰せられた。「あなたは年を重ね、老人になったが、まだ占領すべき地がたくさん残っている。」（ヨシユア 13:1）

山科 理永子（やましな りえこ）

一九五三年一月生まれ、大阪府出身、現在奈良県生駒市在住

夫 一雄（かずお）

ましたが、最後はちょっと不謹慎な言い方ではありますが、ペットのように可愛らしくなり、私の言うことは何でも素直にきくようになっていました。昔、私が子供の時、母が針仕事をしているかたわら、ラジオから「ルーテルアワー」という番組でイエス様の話を聞いていたのを思い出します。母にも小さい証しを与えてくださいと、お祈りしていましたが、ないまま召されていきました。でも主はやはりご真実な方で、棺^{ひつぎ}に入れた次の日に顔を見たら、母は実に若々しく美しく装われていて、とても九十三歳には見えない顔になっていました。これが祈りの答えなんだと思います、天国で出会う顔はこんなかもしれないと思いました。もうその時は親やら子やらではないかもしれません。

イエスは彼らに言われた。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではありませんか。人が死人の中からよみがえるときには、めとることも、と



幸子さんと

一つの棘と忍耐^{とげ}

野口隆

救いの計画

私は、一九四四年（昭和十九年）終戦の一年前に東京中野で生まれ、学生時代まで渋谷に住んでおりました。自分の将来や生活は、自分の力で、努力で切り開いて行くのが当たり前だと信じておりました。周りの助けを借りることがあっても、最後は自分だけしか頼りにならないという思いがあったからに他なりません。何かに頼ろうとすることがあっても、それは自分に都合がよいご利益的なものであったと思います。神にすがって助けてもらうということは絵空事のように思っておりました。

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（2019年 4・18）

このようなことは、全く理解することが出来ないこ



とでありました。目で見えるもの、頭で考え、経験で得た知識に頼った生き方をしておりました。

神などまったく信じられない、神などいない。即ち自分の力に頼った無神論者でありました。せいぜい困った時の神頼み程度の者でした。

困った時に神に頼ることは女々しい者がするものだ。弱い者、自分に自信のない者が神にすがろうとするのだと思っておりました。

今までの人生の中で全て肝心なことは自分で決め、切り開いてきたとの自負を持って生きてまいりました。そしてこのような生き方で困ったことはありませんでした。今の競争社会そのものの生き方であります。努力すれば、頑張れば道が切り開けると信じておりました。まさしく高度成長時代の真つただ中にあり、このような世の中が大好きでありました。

このような者がどのようにしてイエス様と出会い、百八十度人生が変えられたのかを証し致します。

ことはありませんでした。そのうち子供を授かり、順調な生活を送っておりましたが、東京での生活に余裕が出来てくると、妻は日曜に礼拝に行きたいと言い、近くの教会に集うようになりました。

私が行くのを認めたのは、自分のテリトリー（領域）を侵さなければ、何を信じようが許容出来たからです。また家庭を大事に考えておりましたので、妻が喜ぶことであればと認めていたのであります。

しかし、そのうちに妻が求めている教会とは違うということ、あちらこちらと求める教会を探し回るようになりました。その中で吉祥寺のキリスト集会を知るようになり、妻の友人と私たち夫婦の三人で日曜の福音集会に初めてまいりました。一九八三年（昭和五十八年）ごろだと思えます。妻はすっかりその集会が気に入って一人で度々集うようになりました。

私も子供のアッシーとして集会に行きましたが、福音メッセージは何を言っているのか全く分かりません

妻との出会い

一九六六年（昭和四十一年）に社会人になり、その頃にはやった猛烈社員ではありませんが、朝八時から夜九時ごろまでの仕事、往復四時間弱の通勤、時には徹夜も辞さない日々が続いておりました。それでも自分の開発した製品がどんどん売れるなど結果が目に見え、毎日が充実しておりました。目一杯仕事をして、仲間と酒を酌み交わしながら議論を戦わせるのが日課となっておりました。

このような時に結婚の話が持ち上がり、相手はクリスチャンということでありました。無神論者であった私は、仏や神の区別はもちろん、ましてや外国の宗教と思い込んでいたキリスト教などとは無縁の世界にいました。この妻との結婚がイエス様と出会うきっかけになるうとは夢にも思っていないませんでした。その時は意識しておりませんでしたが、まったく価値観の違う者が一緒になったという事に、私は何の疑問も抱く

でした。死、罪、悔改め、イエス・キリストの血潮とか十字架の御業と言った、非現実的なおどろおどろしい言葉が耳について、全く自分の心の中に入ってくることはありませんでした。多分、これらの聞き慣れない言葉に躓いてしまったのかもしれませんが。

あまり深入りしたくない、信じたくないと言う気持ちが強くなり支配していたために、耳も目も閉ざされてしまっていたのであります。集会に行っても人と話すことなく、この得体の知れない集団から早く逃げ帰ろうとばかり考えておりました。このような私の性格を知ってか知らずか分かりませんが、妻は私をイエス様のみもとに連れて行くだけで、後はイエス様と本人の関係だとはかり、強要することもなく、じつと祈り見守ってくれていました。

するとそこに、男たちが、中風をわずらっている人を、床のままで運んで来た。そして、何とかして家の中に運

び込み、イエスの前に置くこととしていた。しかし、大ぜい人がいて、どうにも病人を運び込む方法が見つからないので、屋上に上って屋根の瓦をはがし、そこから彼の寢床を、ちょうど人々の真中のイエスの前に、つり降ろした。彼らの信仰を見て、イエスは「友よ。あなたの罪は赦されました。」と言われた。

(ルカ 5:18-20)

しかし、イエス様は私の頑なな性質をご存知であり、救いのためには八年の歳月が必要であると判断なさっていたのだと思います。妻の態度を通して、イエス様が忍耐を持って働きかけてくださったのだと今では確信しております。これが逆に熱心にこれでもか、これでもかと働きかけられていたならば、百パーセント信ずることはなかったと思います。さらに言えば妻とは破局を迎えていたかもしれません。

どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリス

偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。

そうすれば、はつきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。

(マタイ 7:5)

私たちは、自己推薦をしているような人たちの中のだれかと自分を同列に置いたり、比較したりしようなどとは思いません。しかし、彼らが自分たちの間で自分を量ったり、比較したりしているのは、知恵のないことなのです。私たちは、限度を越えて誇りはしません。私たちがあなたがたのところまで行くのも、神が私たちに量って割り当ててくださった限度内で行くのです。

(2コリント 10:12-13)

このみことばの通り知恵の無い行いをしていたのであります。これは高ぶった生き方をしていた私に与えてくださった一本の棘なのであります。

ト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようになしてくださいませように。

(ローマ 15:5)

仕事上での人間関係

努力すれば、頑張れば道が切り開けると信じていた私にとって、一つの問題が起こりました。会社はオーナー会社であり、その親族の方が私の部署に配属されました。この時は上手く行っていたのですが、暫くして人事異動で私が別の部署に配属され、数年後に元の職場に戻ってみると、何とポジションが替わって彼の部下と言う立場になっておりました。能力・実績・経験どれ一つとっても劣ることは無いと自負していたので、割り切れない思いで憂鬱に過ごすようになりました。この頃の自分は、努力すれば、頑張れば道が切り開けると言う意識の下に、一方的に自分に都合が良いように他人と比較していたのであります。

この世との決別

その後も吉祥寺キリスト集会、家庭集会や地方で開催される喜びの集いに行くという生活を送っていましたが、目に見えて変わることはありませんでした。しかし、仕事での人間関係、集会の皆さんとの出会いや証しを通して氷河が解けるように、何かが心の中にしみ込んで行くのが分かりました。頑なな心に風穴が開き始めました。

今までの何でも自分の力で、努力で切り開いてきた人生も、見込み違いではなかったのかと疑問に思うようになりました。本当に困った時には自分の力など何の役にも立たないとも思うようになりました。しかし、決定的なものとはなりません。集会の皆さんの壮絶な証しにあるように、何か特別な試練が与えられれば信ずることが出来るのではないかなど馬鹿なことを考えたこともありました。

けれども、このように駄目な者に対しても、何か見

えない力によって、集会に集うことが苦にならないばかりか、何かほっとする気持ちを持つようになるまでになつてきました。

しかし、いざ信ずるとなった時、今までの世界から信仰の世界に入ること躊躇するようになりました。何か見えない壁が目の前に大きく立ちはだかつていきました。信仰の世界に入ると、異質の人にならなければいけないのでは、清廉潔白な生き方をしなければいけないのではと思うようになりました。自分には自信が無いし、出来ないのではと決心がつかねておりました。

このように「清水の舞台」で躊躇していた私の背中をある姉妹がポンと押してくださいました。あんなに躊躇していた者があつてなく信仰の道に飛び込むことができました。いざ入ってしまうと何の変わりもありませんでした。何をあんなに心配していたのかと思うぐらいでした。

変わったのは心の中でした。心の問題だったのであ

ります。最初に吉祥寺の集会に一緒に行ってくださいました妻の友人が二十年ぶりに我が家に来てくれた時に妻に言ったそうです。あの時と全く顔つきが違っていると。自分では気が付きませんでした。内面が変わったのだとその時思いました。一九九〇年(平成二年)十二月に吉祥寺キリスト集会で洗礼を受けました。洗礼の時、水が顔を覆った瞬間、スーッと力が抜け、イエス様が私を支えてくださっていると確信することが出来ました。

忍耐の体験

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。(詩篇 37:5~7)

主の救いにあずかる過程で、「忍耐」についてイエス様ご自身が身をもって教えてくださり、このみことばに信頼を置いたときに、イエス様は共にいて導いてくださったことを体験することが出来ました。

私は四十七年間務めておりました会社を、二〇一三年六月に退職しました。

勤めておりました会社は、皆さまの所に電気を届けるための、発電・送電・配電をする電力業界内の配電機器の専門メーカーでありました。ですから皆さんには直接目に触れることもなく、馴染みのない業界だと思っています。

その会社生活の最後の十年間、経営の一端を任せておりました。この頃はまさにバブル経済が破綻し、日本経済が急坂を転げるように落ち込んでいく時でありました。電気が売れない状況で、売り上げが半減、会社の規模もリストラや企業再編等で四割ほどに縮小していたところでした。このような環境の中で、まして

や技術以外何も知らない者が、会社経営など出来るのかと言う不安でいっぱいでありました。多くの人たちの家族の命運を背負っていると思うと逃げ出したくなるような毎日でありました。その後バブルの後遺症も一段落したと思ったら、二〇〇九年のリーマンショックが世界を含め日本経済を襲いました。これも何とかしのいだと思ったら、駄目押するような出来事が起こりました。あの二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災でした。当時、まるで泥船にのって水を掻き出しているような日々でありました。

この時、心に誓ったのは、どのような状態に陥ってもリストラだけは避けようという思いでありました。あのリーマンショックの時は、特管職(特別管理職)として先頭に立ってリストラを遂行しておりました。年功序列社会にどっぷり浸かった日本企業で、人の将来を、生活を左右しかねないものでありました。その時に退社して行った人の顔を今も忘れることがあります

ん。しかし、経営とは決断、結果、責任が全てであり、いつもこの事が問われるものでありました。そのストレスたるや、胃に穴が開くような、と表現される通りの心境でした。

過去の諸先輩がこう話されておりました。「現役時代はあれ程、薬漬けであったのに、辞めてからは半減した」とか、「健診の判定がCからAになった」と仰つて、「何年もやるものではないよ。早く楽になったら良い」と忠告していただいたものであります。

その頃、私の毎日の日課は、朝夕と会社で祈ることでありました。先ほどのみことばに信頼し、今与えられている出来事を試練としてしっかり受け止めることが出来たから、それ程までのストレスを感じることはありませんでした。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたが

たを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント 10:13)

このみことばに励まされ、内に住んでいく下さるイエス様が支えてくださっているから、このような環境下にあっても、百パーセントかどうかはわかりませんが、何とか脱出の道を模索することが出来たと確信しております。忍耐を持って耐えられたのであります。

幸いなことよ。悪者のほかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木のようにだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。悪者は、それとは違い、まさし

く、風が吹き飛ばすもみがらのようだ。それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、罪人は、正しい者のつどいに立てない。まことに、主は、正しい者の道を知っておられる。しかし、悪者の道は滅びうせる。

(詩篇 1:1-6)

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

(2コリント 5:17)

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

(2コリント 4:16)

野口 隆 (のぐち たかし)

一九四四年東京生まれ、笹塚中学校、都立松原高校、武蔵工業大学 (現 東京都市大学) 電気工学科卒業、(株)三英社製作所入社 専務取締役を経て二〇一三年退職、民生委員を二期六年

妻 幸子 (さちこ)

長女 森 若菜 (わかな)

次女 梓 (あずさ)



ご家族と(中央が幸子さん)

**イエスさまは決してあなたを離れず
またあなたを捨てない**

野口 幸子

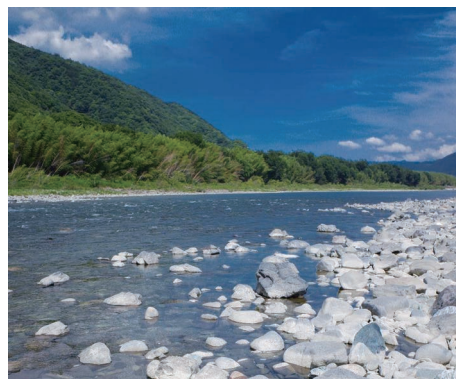
私は、一九四八年(昭和二十三年)五人兄弟(兄二人、弟一人、姉一人)の四番目として三浦綾子さんの小説で有名な旭川で生まれ育ちました。

中学から大学まで、札幌のカトリック系ミッションスクールの姉妹校である旭川の高校に通っておりました。「公教要理」と言う授業があり、神父様が教えてくださっていましたので、神の存在を疑うようなことはありませんでした。

聖書と出会ったのは、友人の家の近くに住んでいたアメリカ人の宣教師に英語を教えてもらおうと門を叩いたのがきっかけでした。英語は教えていただけませんでした。友人と二人で熱心にバイブルクラスに通うようになりました。

初めて教えていただいたことばは次のものでした。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅



びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(三ハネ 3・16)

私の中でずっと疑問に思っていたのは、人は何のために生きているのか、死んだらどうなるのか、どこへ行くのかということでした。

この聖書の言葉で、人は永遠に生き続け、御子イエスさまを信じた人は、永遠のいのちをいただくことが出来ることを知りました。また聖書の中には全ての疑問に対する答えがあることも知りましたが、みことばの深い意味などわかるはずがありませんでした。

それから暫くして、宣教師から、市民プールでバプテスマを受けました。父も母も、私がクリスチャンになることに反対はしませんでした。信ずるものがあれば、何かあった時に強く生きられるからと言うことでした。父は、私が反抗すると「右の頬を打つような者には左の頬も向けなさい」と書いてあるよ、と言っており

ました。教養のためだと思いますが、父は聖書を読んでいたのです。

その後、宣教師はお子さんの病氣治療のためアメリカに帰られました。友人は高校卒業後、千葉にあるバプテストの神学校に行き、今はご主人と共にインドネシアの宣教師として福音伝道に携わっております。私は札幌の短大の保育科へ進みました。以前、日曜学校の奉仕をさせていただいた関係から、子供たちにも福音を伝えたいとの思いを持っていたからです。卒業後は、友人の紹介で教会附属の幼稚園の先生になり、三年間勤めました。その教会には牧師、宣教師がおりましたが、大きな問題が起こり、辞めざるを得なくなりました。そのような中で、三年の間、子供たちに福音を伝えることが出来たのは大きな恵みだったと思っております。

旭川に戻った私は、吉祥寺キリスト集会と同じように献金制度も会員制度もない、ニュージージラランドの宣

教師が立ち上げたばかりの教会に導かれました。十人足らずの小さな群れでしたが、喜びに溢れておりました。町の中心のビルの一室を借りて集会を行っていました。終わった後は、よく町の中へトラクト配布に出かけたものでした。だんだん救われる人も増し加えられていきました。しばらくして、教会の本棚にリンデ

さんの「実を結ぶ命」の本があるのを見つけました。それは三橋さんという伝道者が持ち込まれたものではないかと思われま

す。この教会では、札幌から三橋さんという肢体の不自由な伝道師に来ていただいて伝道集会を開くことがありました。以前、吉祥寺キリスト集会でも三橋さんをお呼びして伝道集会をされたと聞いたことがあります。そして三橋さんから吉祥寺キリスト集会のことを聞いておりました。私もいつか行ってみたいと思っておりました。しかしその後、集っていた集会は、ちりぢりばらばらになってしまいました。それ以降、私も教会へは行かなくなってしまいま

した。一緒に教会を離れた知人と山登りをしたり、スキーをしたり、旅行に行ったりとこの世を楽しんでおりました。

そのような頃、主人とお見合いの話がありました。私は教会で結婚式を挙げることに、信仰の自由を認めてくれること、一年に一度は旭川に帰省することなどの条件を付けました。しかし主人はこのような条件を、余り気にも留めていないようでした。

慣れない東京での結婚生活にも慣れ、長女が二歳の頃やつと落ち着いてきた生活の中で、旭川にいた時に一度行つて見たいと思っていた吉祥寺キリスト集会に、家族三人で行くことが出来ました。まだ旧会堂の時代でしたが、福音集会が終わってから、パンとスープをいただいたのを覚えております。初めての印象は、人の多さとメッセージの素晴らしさに圧倒されたことでしたが、私の飢え渴いた心を満たすには充分でした。

鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。（詩篇 42:1-2）

まだその頃は子供が小さかったので、時々しか集うことが出来ませんでした。長女が小学校に入学し、次女が三歳の頃に、東京都大田区から埼玉県狭山市に引っ越してきました。その頃、所沢の集会の方から祈り会に誘われ、行くようになりました。所沢のある方が初めて集会に行った時に、ベックさんから「あなたのご主人は救われていますか」と聞かれたそうです。それからご主人の救いを祈るようになったと言われておりました。それから、私も主人のために祈るようになり、祈り会の皆さんにも祈っていただきました。

そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみにとばによるのです。

で、一九九〇年十二月に吉祥寺キリスト集会で主人は洗礼を受けました。同じ土台に立つことが出来て感謝でした。主人からも私と結婚しなければ、イエスさまを知ることはなかったと言われ、主の憐れみにただただ感謝でした。

私の旭川の家族は、姉は赤ん坊の頃ジフテリアに罹り亡くなったと聞かされておりました。二番目の兄は五十代で脳腫瘍を患い、入退院を繰り返しておりました。札幌のキャンプの折、ベックさんに病院に行っていただきお話をしてもらいました。その時には病気が進んでいましたので、はっきりとした信仰告白を聞くことはできませんでした。今は天国で再会できると確信しております。母も旭川キャンプに二度ほど参加し、ベックさんとお話しをする機会がありました。晩年はグループホームに入っておりましたが、脳動脈瘤や心房細動等の病気があり、二〇一九年四月に百一歳と五箇月で天に召されました。母は父が長男でしたの

（ローマ 10:17）

主人にみことばを聞いてほしいと願っていましたが、高度経済成長期の真ただ中、企業戦士として働く主人は、朝早くから会社に出かけて夜遅く帰るという生活で、日曜日に集会に行くのは無理でした。ある時、友人が所沢にある教会で午前中カウンセリングの勉強会をし、午後四時からその方々のために福音集会も行っているから、どんな所か見てきてほしいと依頼され、偵察に行ったのがきっかけで行くようになりました。初めて聖書の言葉を聞く人には、牧師さんの話はわかりやすく、しかも面白く、主人が聞くにはとても良いと思ったので、日曜日の午後四人で出かけました。そんなことが半年ほど続いたのですが、その勉強会も終了したので私たちも行かなくなりました。

その後、荻窪や滝山の家庭集会、軽井沢のキャンプへと誘われ、ベックさんからお話しをお聞きすること

で、若い頃から舅と姑に仕え、小姑の世話をし、しかも父に早く先立たれて苦勞の多い一生だったと思います。しかし晩年は穏やかで孫たちにも囲まれ、イエスさまからの平安を与えられた日々だったと思います。

私の長女は二年前に結婚し、子供を一人与えられました。私たちにとつては初孫であります。孫の成長を見させていただく恵みをいただいたことに感謝しております。二人の子供たちは、今は主から離れておりますが、一番良い時に再びみもとへ戻していただけると確信して日々祈っているところです。

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。（箴言 16:9）

主よ。私は知っています。人間の道は、その人によるのではなく、歩くことも、その歩みを確かにすることも、人によるのではないことを。（エレミヤ 10:23）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

(ローマ 8:28)

野口 幸子 (のぐちさちこ)
一九四八年旭川生れ、旭川中央小学校、藤学園旭川中学・高等学校、藤女子短期大学保育科卒業、バイブルバプテスト幕張幼稚園、森山整形外科病院勤務、結婚

後主婦

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。

(ヘブル 13:5)

夫 隆 (たかし)

長女 森 若菜 (わかな)

次女 梓 (あずさ)

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。

(申命記 31:8)



キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

【電話】 0422-21-8450 (集会所)
東京都 武蔵野市 吉祥寺 本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】 ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によりこびをもつてなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

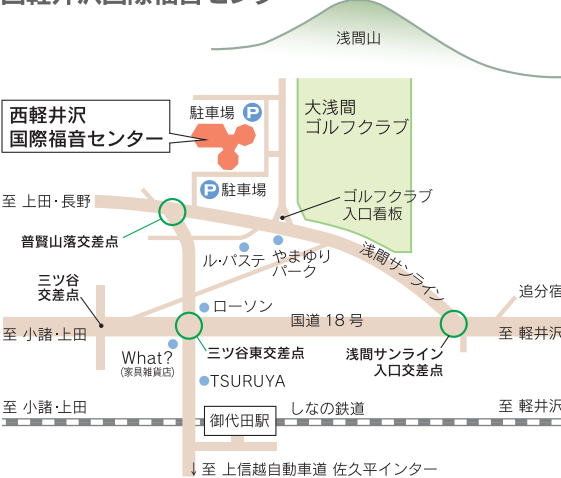
家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
【電話】 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
【電話】 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

アクセス

【鉄道】
しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分 (1000 円程度)
徒歩 約45分 = 3 Km
御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】
上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分 (約7km)
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒とすることができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのことーヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれー私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

実を結ぶ命 がんのうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そここのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもかも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物



主は生きておられる 第54号

定価100円（税込み）2020年8月1日発行

編集スタッフ	岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力
	芳我幸雄 福留伸子 牧野正士
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守格太郎
発行所	キリスト集会
サイトマップ(キリスト集会のご案内)	http://christ-shukai.net/

写真や版画のご提供をいただきました。

勝手ながらお名前は省かせていただきます。

ご協力ありがとうございました。